

1 6 物品価格 [1993年7月調査-()は4月調査、通貨はレヴァ]

(交通)

バス、トロリーバス、トラム (ソフィア市内)	
一回券	(1.5) 3.0
一日券	(4.5) 9.0
一ヵ月定期	(80) 160
三ヵ月定期	(220) 440

(郵便)

封書(日本まで)	8
葉書(日本まで)	6

(電話)

市内公衆電話—通話	0.20/0.50
国際電話(日本まで1分)	(30)55

(食品—主食、調味料、飲料)

パン	4
米(1Kg)	16
即席ラーメン(韓国製)	11
スパゲティ	16
小麦粉(1Kg)	20
食用油(1ℓ)	48
塩(1Kg)	6
砂糖(1Kg)	13.5
ミネラルウォーター	8
100%ジュース(1ℓ)	25
コココーラ(1ℓ)	2.8
蜂蜜(小瓶)	25
卵	1.2

(食品—野菜、果物 単位は1Kg)

人参	35
玉葱	4
じゃがいも	(6) 8
きゅうり	(23) 21
かぶ	(35)
長葱	(32)
なす	(68)
トマト	(52) 9
キャベツ	(17) 8
ほうれん草	(10)
にんにく	(12)
マッシュルーム	(30)
大根	(12)
生しいたけ	(35)
サニーレタス(株)	(4)
パイナップル	(80)
キウイ	(32)
バナナ	(25) 22
りんご	25
オレンジ	(12)
レモン	(16) 10
グレープフルーツ	(34)
マンゴ	(160)
アボガド	(78)

(嗜好品)

ワイン	12~
ウィスキー	100~
タバコ	7~23
インスタントコーヒー	35~
コーヒー豆(500g)	55~
紅茶ティーパック	20~

(その他)

石けん	4~
トイレットペーパー	6
シャンプー	50
ハンドクリーム	40
洗剤	50
トイレ用洗剤	45
洗濯ばさみ(1ダース)	6
ハンガー(1ダース)	20
モップ	90
バケツ	33
アイロン	250
ミキサー	400
コーヒーマーカー	1100
ラジオカセット	2500
テレビ14型	8500
21型	13500
中型冷蔵庫	6500

(食品—肉、加工品 単位は1Kg)		音楽テープ	35
牛肉	70	CD	125
豚肉	70	コピー1枚	1
鶏肉(生)	50	露店のコーヒー	2
(冷凍)	32	喫茶店のコーヒー	5
ソーセージ	60	ホテルのコーヒー	35
サラミ	90		
(食品—乳製品 単位は1Kg)			
チーズ	60		
バター	100		
ヨーグルト	12		
牛乳	25		

*以上の価格はあくまでも平均である。野菜、果物は季節によって異なる。

1.7 兵役

ブルガリア国民であり、身体に障害の無いすべての男子には兵役の義務がある。高校卒業後、または18歳になってから1年半。(大学生は大学卒業後、半年間)

1.8 ビザ／ブルーパスポート

東京のブルガリア大使館は3ヵ月に一回入国ビザしか発行しないので、隊員は赴任後にビザ延長の手続きが必要である。

まず入国時に空港で入国カードを記入させられるが、外国人はこの入国カードとパスポートを持って48時間以内に任地の警察署に出向き住所登録をすることになっている。なおホテルに滞在する場合、この手続きは不要であるが、隊員が任地に赴きアパートや大学の寮などに住む場合、入国日あるいは最後に利用したホテルのチェック・アウト日より2日以内に住所登録の手続きをしなければならない。ビザの延長およびブルーパスポートの発行はこの住所登録の手続きをなくしては成しえないものである。

尚、住所登録の手続きを怠った場合に罰金(500レバ)が科されることもあるが(今回の短繁の隊員の中には罰金を取られた者もいる)定かではない。また入国カードは出国時に必要であるので大切に保管することが肝要である。

ビザの延長手続きには次の3つ、パスポート、入国カード、ビザ延長申請理由書(配属先に書いてもらうこと)が必要である。まず住所登録をしている任地の警察署に出向き、指定の書類に必要事項を記入する。ビザ延長のための費用(延長期間およびビザの種類—シングルかマルチ—で費用が異なる)を指定の金融機関で入金する。領収書と先ほどの書類および持参したパスポート、入国カード、ビザ延長申請理由書を添え警察署の窓口へ再び出向けばその場で発行してもらえる。

なお隊員は任国外研修旅行および業務で国外に出ることがあるので、なるべく早い時期に2年のマルチビザを取得するのが望ましい。また仮にマルチビザを取得する前に国外に出ることがあっても、再入国時に空港で1回入国ビザ(3ヵ月)を取得することは可能である。

ブルーパスポートについて。ブルガリア人は国外旅行用と国内旅行用の2種類のパスポートを持っており、国内旅行用のものは旅行時だけに携帯するものではなく、いつでもどこでも身分を証明するID（アイデンティティ）カードである。ブルガリアに6ヵ月以上滞在する外国人はこのパスポート（通称ブルーパスポート）を取得することが可能である。

取得方法であるが、必要書類－パスポート、入国カード、写真3枚（3cm×4cm）－を用意し、任地の役所に出向き指定の書類に必要事項を記入する。（写真1枚必要）20レバの収入印紙を買い、書類を持って警察署へ行く。別に指定される書類に記入し、パスポート、入国カード、写真2枚を添えて窓口提出すれば2日後にブルーパスポートがもらえる。費用は20レバのみである。

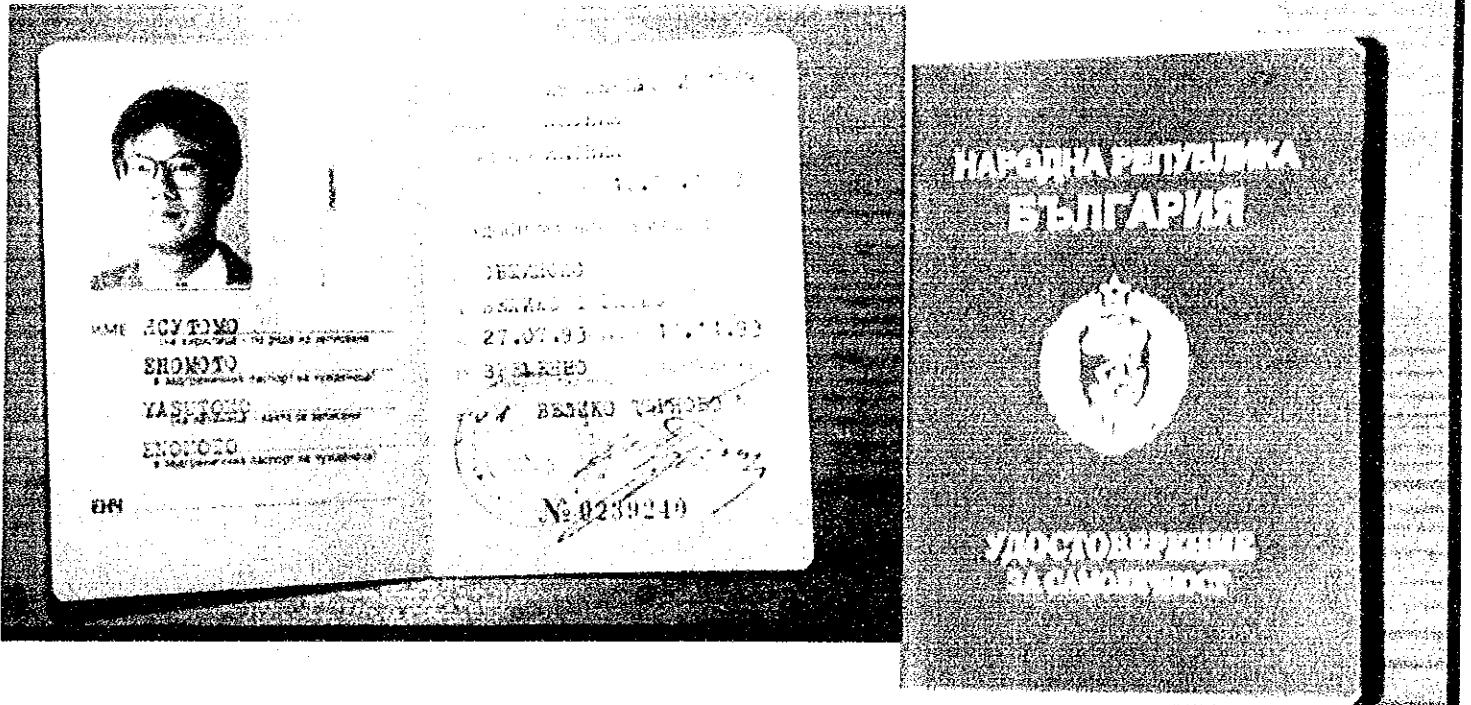
さてこのブルーパスポートの肝心の効用であるが、ブルガリアではブルガリア人と外国人を区別する2重価格制をホテルなどの宿泊施設で実施しており、ブルーパスポートがあれば外国人でもブルガリア人料金で済ませることができる。（料金は50%になるが、ホテルによってはこの特典がきかないところもある）

具体的な恩恵はホテル料金に関するものぐらいなのであるが、スポーツアカデミー配属の柔道隊員が職場発行のIDカードで身分を証明しようとしたところ、その効力を果たさなかったこともあり、一般に広く知られているブルーパスポートを取得することは隊員にとって必要不可欠である。

このブルーパスポートはブルガリアに入国して6ヵ月後に取得が可能なのであるが6ヵ月以上にわたってブルガリアに滞在することが証明できるのであれば、6ヵ月を待たずに取得することは可能である。

なお以上はヴェリコ・タルノヴォでの取得手続きであるが、ソフィアにおいても基本的には同様であると思われる。また全ての書類はブルガリア語での記入であるので配属先の職員に同行してもらい手続きをするのが肝要である。

ブルーパスポート



第3章 業務報告

1 日本語教育

(1) ソフィア大学

ブルガリアソフィア大学日本語教育は1968年夜間・公開の選択講座として始まり、1990年10月、ソフィア大学に日本語日本文学科が設置された。隔年新生を募集しており、英語とブルガリア語の試験を通して入学してくる。現在、1年生11人、3年生9人（そのうち6名が文部省による留学で日本留学中、1名が韓国留学中）が必須科目として日本語を学んでいる。昼の学生は国際交流基金より派遣されている水上氏とブルガリア人教師が指導している。

JOCVは夜間講座を担当することになり、やはり、ブルガリア人教師とペアを組んで授業を担当している。夜の講座は公開講座で、1年、2年、3年、旧3年（3年以上勉強しているもの）と4クラスあり、週2回ずつ、1回90分の授業である。（1コマ45分）教科書は初級は日本語初歩、中級は中級I（国際交流基金）をつかっている。

ブルガリア人教師は日本語がとても上手であり、皆、日本に滞在したことのある人（現在、滞在している者2名）だが、授業は文法をブルガリア語で説明していき、訳読していく方法をとるので読み書き中心になり、学生たちは会話・聞き取りが弱い。又、パターンプラクティスなどの練習、日本語だけの授業に慣れていない。動詞の活用を全て最初に教えたり、漢字は音読みと訓読みを必ず同時に教えたり、日本での日本語教育では馴染めない指導をしていたようだが、学生達はとても優秀で、よく理解している。特に暗記力に優れているが、応用力となると、途端に弱くなる。授業中、教師の言葉を聞き取って書き取り、家で覚える、というやり方に慣れていようだ。ブルガリア人教師の表記に間違いがあり、その書き方で学生も何年も書いているので、ノートをチェックし、その度に訂正する必要がある。

授業は週2回のうち、1回をブルガリア人教師がブルガリア語で語句・文法説明、1回を日本人教師が練習・応用と分担して指導している。宿題・試験問題の作成は日本人教師が担当している。特に会話力、聴解力をつけるために『絵とタスクによる日本語』を使っでの聞き取り、1分間スピーチ、と話す機会、聞く機会を多く設けた。

今後、会話力、聴解力をつける指導は、JOCVの役割のひとつになるだろう。

現在、夜間講座の学生の在籍数は、1年15名、2年12名、3年9名、旧3年7名だが、毎回10名以上になることはほとんどない。学生は社会人、大学生、高校生、と様々で、クラス内での能力差もある。以前19:00～21:00だった授業が守衛の都合で17:00～19:00になり、そのために遅刻をしたり、休む学生がいる。授業料が値上がりしたことも学生が少なくなったことの原因のひとつのようだ。何れにしても、遅刻・欠席は夜間講座の場合仕方がないと思うので、状況にあわせて指導していくしかないだろう。

今後、エスカレーター式に学年をあげるのではなく、能力別クラス編成をし、次の学年にあがるための試験を実施し、合格しなければもう一度同じ学年をやり直すというシステムにしていきたい。このことは、国際交流基金の教師からも出ている意見で、実行できればと思う。そのためには、1年で日本語初歩L1～L15、2年でL16～最後まで、3年で中級Iというペースを揃える必要がある。一週間で一課というペースはとても早く、能力の高い学生に合わせているので、今後一考の余地ありと思うが、ブルガリア語で説明することによってそのペースが保てるのだろう。問題は、ペアになるブルガリア人教師に通訳などの仕事が入ると、授業を無断で休むことだ。単語説明が入らないと練習が出来ないので、進度が遅れてしまう。教師の給与は少なく、通訳の収入は高額なので仕方が無い

と思うが、せめて休講を事前に知らせる、補講する必要性を訴えていきたい。特に夜間の学生は授業料を払っているので、15週間分の授業を受ける権利がある。苦しい生活をやりくりしている学生もいると思うので、学生側に立って改善していく必要があるだろう。

今まで取られていなかった学生の出欠も必ずつけるようにし、ペアの先生にもノートを渡し、付けていない時には必ず聞いてその習慣を作っていく必要がある。こちら側が出欠を知りたいと意思表示をし、その度につけて聞いていけば、時間は掛かってもその内に習慣になるだろう。

社会体制がまだ整っていない中、大学内もスムーズに事が運びにくく、日本語課内も例外ではない。現在、主任のツベタナさんが来日していることもあり、代理のホロドビッチさんは責任を持って課をまとめていこうという意思に欠けるため、国際交流基金の水上氏が実質上とりまとめをしている。彼はミーティングを週一回行うようにしているが中々メンバーは揃わない。教師間のコミュニケーションも、ミーティング以外はそれぞれの授業が重なる時に顔を合わせる程度だ。当初、教師の流れを見るために一週間ほど朝から晩まで日本語課の部屋で仕事をしたが、三十分の遅刻は当たり前という教師もあり、自分の授業を済ませるとすぐ帰るので、教師間の連絡は難しい。そのためにもミーティングは大切な場となる。今後定期ミーティングをはじめ、教師間のまとまり、話し合いを持つことも現地教師が中心になってやっていけるようになればと思う。単にツベタナさんが帰国すれば済む問題なのか（今年11月頃帰国予定。だが、延長の可能性がある。）、今後の課題となるのかは今のところ分からない。全体を見てまとめる人がいないので、今回JOCVの担当する時間のセッティングは、国際交流基金の水上氏がすべて行い、大学側は関与しなかった。突然日本人教師がもう一人増え、その人はボランティアらしい、という認識程度のような。シニアを要請し、シニアを中心にプロジェクトを組んで、辞書作り、教材作りと進めれば活動は広がると思う。

現在授業は東洋語学センターというところでヒンズー語、中国語、アラビア語等とともに日本語学科の授業、公開講座が行われている。（現在中国人、インド人、韓国人〈第2外国語として〉、日本人の講師がいる）教師用の部屋があり、本棚には教材、本が揃っている（国際交流基金より）。また別室にも教材、本（同じく国際交流基金より）があるがここは鍵が掛かっている、常に入れられるわけではない。センターの図書室にも大使館よりの寄贈図書があるようだが、どの本も学生が自由に見られるようにはなっていない。多くの寄贈図書は、教師の特権で、それぞれが持ち帰ったりもしているようで、それを防止するため、教師に対しての本の貸出表を作るなどしている。今後、本の整理、そしてそれらの本を学生に対して貸し出せるようになればと思う。それに対して現在、東洋語学センター内に日本専用図書室を作る計画がある。日本の文化・本に自由に触れられる場所が必要だと思うので、早急に実現できたらと思う。参考に時間割とソフィア大の組織図、及びブルガリアの教育制度についての表を添付する。又、教材リスト（1993年分ドネーションのみ）も添付する。他にも多くの教材及び参考書が寄贈されているが、現在正確な数がかみかずにいるらしい。（図書室にダンボール箱ごと置いてあるという話もあるし、教師が学生に売ったりしているという話も聞く）さきに触れた日本語専用図書室の件は、大使館側がほとんど実現できるところまでことをすすめているにもかかわらず大学側で責任をもってサインをする人がいず、現在足踏み状態ということだ。

JOCVの事務所開設の際、図書室を設け、とりあえず大使館にある本を移し一般に開放できるようになればと山口調整員と話し合った。

a. 講師について

ソフィア大日本語科で日本語教育にたずさわっている講師について少し書こうと思う。本来なら人間関係その他について具体的に報告書に書く必要はないだろうが、今後JOCVがどういう位置づけになるか、というところまで話がすすむので、あえて具体的に書いていこうと思う。

①ツベタナ クリステバ

主任。だが現在来日中。1993年11月帰国予定であったが、帰国を延長する可能性がある。

②リュドミラ ホロドビッチ

主任代理。ロシア人女性。主任として科をまとめていく、という立場なのだが、そういうことは苦手ようだ。自宅に電話がないこともあるが、連絡なしで授業をキャンセルすることが多い。通訳の仕事がはいるとそちらが優先になる。

③シルビア ポポワ

古くからソフィア大の日本語科にかかわってきた人。1993年から5月まで、私用で来日。1994年1月から1か月間国流基金の研修で来日予定。

とてもストレートに話をするので、しばしば日本人ともブルガリア人ともぶつかってしまう。日本語教育、又日本と長くかかわってきたことに対する自負があるのだが、まちがった表記を学生に教えていたり、日本のやり方（学生の出欠をとる、授業内容を連絡しあう、会議をもつなど）に対して強く反対したり、トラブルメーカーではある。

④バロワ

非常勤講師。翻訳家として、多くの日本文学書をブルガリア語に訳している。日本語教師の経験は長くないが、勉強家で、熱心に授業にとりこんでいる。

⑤水上俊二

国際交流基金より派遣。1年前より日本語を教えている。マリアさんという夜間講座の学生を秘書として雇い、色々な仕事をまかせている。

b. JOCV派遣について

JOCV派遣について、講師全員に意見を聞いたところ一応全員賛成。が、2名体制については最近、ホロドビッチさん、ポポワさんは難色を示している様子だ。日本人の数が増え、自分達の立場が弱くなることを恐れているのかもしれない。嫉妬やプライドなどがわかりやすくあらわれてもいるので、この人間関係が明日にも改善ということはありませんが...。まるで子供同士の縄張り争いを書いているようで恥ずかしいのだが、以上のことからJOCVは地方展開の方がよい活動ができるのではと思う。例えば、ベリコタルノボ大などは大学側の理解が得られ、活動は非常にやりやすい。

英語教育は歴史・レベルもちがうので簡単に比較できないが、ピースコーは殆ど地方で活動している。我々も地方の需要を調べたく、大使館に申し出たのだが、今は動かないでほしい旨を伝えられた。大使館内でも意見がわかるようなのだが。今後、大使館側ともよく話し合っってよりよい活動へ広がっていけばと思う。

要請される隊員について、日本語教授経験がない人は大変だろう。もっともこれは世界中どこでも言えることかもしれないが...。学生は初級から上級までいるし、能力の高い学生も多いのでそれに対応しなくてはならない。

また、大学内で様々な人間関係の中をうまくやっていける人と考えると、あまり若い人だと負担が大きいだろう。

国際交流基金の先生と協力しあってよい仕事をすすめていければと思うが、授業を分担するのではなく、例えば教材研究などで共に協力しあって仕事をすすめていく方向が望ましいと思う。

ソフィア大内でもJOCVは夜間の講座、基金は昼の学科、とわけた方がよいと思う。というのも、現在、水上先生よりJOCVの助けがほしいという申し出がある。ホロドビッチ、ポポワさんでは日本語科の授業もおぼつかない...というからなのだが、先のべた人間関係、ボランティアということ、専門性からみても、わけて活動した方がよいと思う。

最後に、教育省との連絡に関して付け加えれば、JOCVの担当はカラマコフ氏で、とても真面目で熱心だが、何しろ忙しい方で、また、諸手続きに全く慣れていないのでビザ、ブルーパスポート手続きにとっても時間を要している。連絡を取るのも容易ではなく、やっと連絡がついて教育省にでかけると、今日はサイン、次の日はコピー、翌日、やはりパスポートを持参、という、なんとも要領の悪いことをしている。入国48時間以内に居住証明を取らなかったで、その証明を取るのに1人500レバの罰金を払った。そのことがわかったのは2か月後だった。その証明が無いとブルーパスポートを取ることが出来ない。ブルーパスポートを持っていると、ブルガリア人と同じ扱いを受けられるのでホテル代など外国人料金を払わないで済むし、隊員にとっては無くてはならないものになるだろう。

c. 参考時間割 1993年3月～6月 ソフィア大日本語科 夜間公開講座

月	9:00~11:00 (のじゅご)	11:00~13:00	13:00~15:00	15:00~17:00	17:00~19:00 旧3年 内田 1年 ポポワ)
火	1年 バロワ	1年 水上 中国語学科 ホロドビッチ	3年 水上	3年 ホロドビッチ	2年 バロワ 3年 内田
水	1年 バロワ	1年 ネリ	1年 水上 3年 バロワ	3年 ホロドビッチ	1年 内田
木	中国語学科 内田			3年 水上	1年 17/7 2年 内田 3年ホロドビッチ 旧3年 バロワ
金					

d. この半年間のソフィア大日本語科内の行事について

①茶道講習会

大使館主催

対象 ソフィア大日本語学科1年生
第18高等学校日本語学習生
他芸術大学
日程 3/21～3/31
オリエンテーションを含め6回稽古。
裏千家モスクワ講師が来プして指導した。
場所 キリルとメソディー美術館内

②作文コンテスト及びその表彰式

大使館主催

日程 4月16日
場所 東洋言語センター
対象 一般（実際にはソフィア大日本語科の学生、
第18高等学校の生徒、公開講座の学生）

作文は5名の採点者により採点。教師4名（水上・内田・戸島・松永）の採点（各分野別5段階評価）を見て、大使館が最終的に判断する。

最優秀者2名 日本旅行（今年は特別とのこと）

〃 1名 ウォークマン

以下 辞書、カレンダー、ノートが贈られた。

③国際交流基金成績優秀者研修試験

国際交流基金主催

日程 4月9日
場所 東洋言語センター
対象 ソフィア大日本語科の学生
公開講座2、3、旧3年

毎年行われるもので、優秀者は2週間日本へ行ける。

④能力検定模擬試験4級

国際交流基金主催

日程 4月26日
場所 東洋言語センター
対象 ソフィア大日本語科の学生
公開講座学生希望者
受験料 30レバ

⑤文部省留学生試験

大使館主催

日程 5月25日
場所 東洋言語センター
対象 ソフィア大日本語科の学生
公開講座希望者

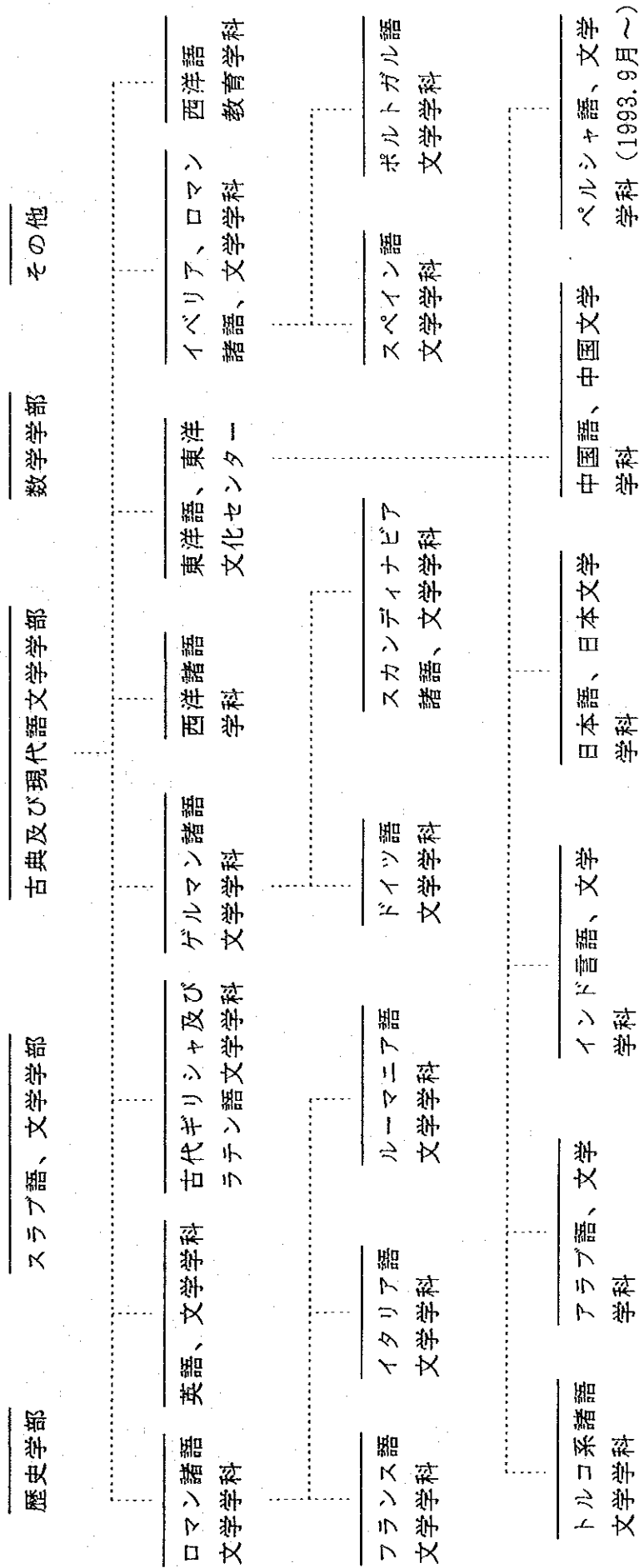
e. ソフィア大日本語学科 1993年 国際交流基金ドネーションによる教材リスト

はっきりとわかっているのはこのリストにあるもの。以前のもはリストはあっても教材がないものがあるらしい。AOTSの絵カード・スライドバンク(12ヶ月シリーズ、場所シリーズ、生活シリーズ)フラッシュカードはある。本棚を見ているととても多くの本・教科書がある。

書 名	発 行 所
日本語中級1 練習帳	国際交流基金
日本語初歩 漢字練習帳	"
現代日本語コース中級1	名古屋大学出版界
A COURSE IN MODERN JAPANESE VOL.3	
現代日本語コース中級2	"
A COURSE IN MODERN JAPANESE VOL.4	
現代日本語コース中級1	"
聴解ワークシート3冊	
現代日本語コース中級2	"
A COURSE IN MODERN JAPANESE VOL.4	
聴解ワークシート3冊	
総合日本語初級から中級へ	凡人社
中・上級日本語読解教材 朝日新聞で日本を読む	くろしお出版
日本語テスト問題集(聴解編)	凡人社
" (") カセットテープ1巻	"
日本語テスト問題集(文法編)	"
日本語能力試験1級受験問題集 カセットテープ2巻	アルク
"	"
日本語実力養成問題集 専門教育出版	
日本語能力試験1級対策用カセットテープ2巻	"
日本語能力試験2級対策用カセットテープ2巻	"
日本語実力養成問題集	"
日本語能力試験3級対策用カセットテープ2巻	
日本文法セルフマスターシリーズ5も・だけ・さえなど	くろしお出版
新明解国語辞典 第四版	三省堂
例解新国語辞典	"
研究社日英辞典	研究社
外国人のための基本語用例辞典(第三版)	大蔵省印刷局
英語人と日本語人のための日本語擬態語辞典	ジャパントイムス
日本語 新版(上)	岩波書店
日本語 新版(下)	"
日本語テストハンドブック	大修館書店
コミュニケーション重視の学習活動3 コミュニケーションゲーム	凡人社
歌って覚える日本語	"
外国人向け、ひらがなカタカナ五十音表	"
初級日本語問題集 語彙文法20のテーマ	"
講座 日本語と日本語教育 3 日本語の音声・音韻 下	明治書院

(f) ソフィア大学組織図

ソフィア大学 (学長)



(g) 引継ぎについて

以下、平成5年度2次隊への引継ぎの為にソフィア大公開講座各クラスについてくわしく記す。

1年 登録学生数・・・12名。だが、後半は8名の決まった学生にしぼられる。まとまりのある活気のあるクラスでクラスの雰囲気がとてもよい。休んだり、やめてしまった学生に学生同士で続けていくようにしたりしている。それぞれの年齢差が大きい中、家族のようにまとまっている。

JOCV赴任前はポポワ先生が担当していた。ポポワ先生来日後は水上先生とJOCVが二人で担当。練習と文法・導入と分担しておこなった。

学習内容・・・日本語初歩 L1～L14

L5終了時L14終了時にまとめのテストをした。

歌・折り紙を授業の合い間などに取り入れた。

『り・な』の表記を間違えて覚えているので気をつけて指導してほしい。

学生名1 バシルカ・・・声が小さくおとなしいがよく理解している。

2 マキシミアン・・・のみ込みの早いほうではないが熱心である。

彼の反応は、授業を進めるにあたって参考になる。

3 ジャナ・・・後半とてもよく勉強し頑張った。マキシミアンと

共に彼女の反応はこのクラスの理解度の目安になる。

4 ペータル・・・日本人の奥さんがいるが日本語の勉強は初歩。

5 ペテヤ・・・デニツアの先輩に当たる。優秀。

6 シルビア・・・優秀。大学受験のため、後半欠席。

7 ニコラエ・・・名簿にはあるが一度も出席せず。

8 デニツア・・・高校生。とても優秀で会話も積極的。英語もできるができるだけ日本語を使おうとする。

9 ミレナ・・・英語ができる。

10 スベロミラ・・・英語はできない。文法などあまり理解できていないが自分の気持ちを相手に伝えようといつも努力をしている。

11 ガリナ・・・良くできたが後半欠席。

12 ディアナ・・・後半欠席。

2年 登録学生数・・・13名。最後の半月は4・5名しか出席しなかったが平均は9名。

当初、学生の反応が消極的なので、戸惑った。そのため、やりにくいクラスという印象を受けたが、授業後一緒にお茶を飲んで打ち解けてからはやりやすくなった。

赴任前は水上先生とバロワ先生が二人で担当。三月まで一週間三回していたので良く理解し、レベルも高い。ただし、会話力はあまりない。

JOCVとバロワ先生が担当。週二回。

学習内容・・・日本語初歩L26～L33

L17～L25のまとめのテストをした。

絵とタスクで学ぶ日本語 4-1まで

歌・折り紙を授業の合い間などに取り入れた。

文部省留学試験に六名、国際交流基金成績優秀者研修試験に五名受験した。

学生名1 エバ・・・大変優秀。交流基金のテストではL25まで学習した学生の中で(日本語科の学生を含めて)一番の成績だった。

2 ガンザロワペテヤ

遠くから通ってきている。理論で納得する。

3 アンドロニカ

後半欠席。文法が良く理解できていないがエバに助けられている。

4 ブラゴベスト・・・熱心。会話は苦手。

5 カリナ・・・後半欠席。

6 ゲノベワ・・・後半欠席

7 アルベナ・・・後半欠席

8 マルコワペテヤ・・・会話は苦手。

9 アレキサンダー・・・二回のみ出席。

10 バシロ・・・時々出席してくる。

11 ユリアン・・・文法の授業には出席していたようだが、練習には出てこなかった。

12 アンナ・・・後半一ヵ月のみ出席。以前にも学習していたらしい。

13 トリナ・・・作文コンテスト優秀賞により来日した。

3年 登録学生数・・・9名。うち、6名が常に出席していた。

会話、聞き取りが弱い。年齢的なもの、職業の違いもあり、クラス内が二つにわかれていた。

赴任前はホロドビッチ先生担当。赴任後はJOCVとホロドビッチ先生担当。休講になることが多く、週一回ペースで続いたこともあった。

学生名1 イリヤナ・・・漢字をよく勉強している。

2 カメリア・・・会話を積極的にしようと努力する。

3 ワレンティナ

よく理解しているが聞き取り・会話が弱い。四級模擬テストでは文法が満点だったのに聞き取りが悪く不合格だった。

4 カテリナ・・・学生。理解が早い。

5 スタンカ・・・休みが多い。授業中は熱心。

6 トマ・・・ソフィア大学生。漢字をよく知っている。

7 ブラドミール

高校生。後半欠席。

8 マリア・・・ゆっくりと勉強すればわかるようだ。

9 フリスト・・・一度も出席せず。

文部省留学試験に一名、国際交流基金成績優秀者研修試験に七名受験した。

学習内容・・・中級IL4～L7

絵とタスクで学ぶ日本語 4-1まで

旧3年 登録学生数・・・10名。うち、7名が通常出席。

会話をしようと努力する人が多いのでクラス内は活気がある。役割分担の会話など進んで参加するので雰囲気盛り上がる。が、宿題は出してもやっこないし出来ないというので、このクラスにはあまりださなかった。

赴任前はバロワ先生担当。赴任後はJOCVとバロワ先生担当。

学習内容・・・中級IL7～L10

絵とタスクで学ぶ日本語 4-1まで

読解用のテキストより抜粋

学生名1 イワンイワノフ

国際交流基金成績優秀者研修試験の結果により九月に来日予定。会話は、まず頭でよく考えてから話そうとする。

2 ベスカ・・・ほとんど発話しなかったが、後半当てると答えられるようになった。

3 トドル・・・来日経験あり。

4 ストイル・・・一回のみ出席。

5 イワンストイコフ

経済大学学生。読解・筆記は良いが会話が苦手。

6 フリスト・・・後半欠席。

7 ツァンカ・・・年齢は高いが熱心によく勉強している。

8 マリア・・・国際交流基金水上先生の秘書。日本人の知り合いも多く、自然に会話ができる。

9 ミルナ・・・文法の授業に主に出席していた。

10 アントン・・・高校生。六月上旬に二度ほど出席。会話もよくでき、文法もよく理解している。が、彼が出席するとクラスの雰囲気が変わってしまう。彼はこのクラスではないという人もいるが・・・

文部省留学試験に二名、国際交流基金成績優秀者研修試験に六名受験した。

中国語学科

登録学生数・・・5名。うち、3名のみ出席。

赴任前はポポワ先生担当。ポポワ先生来日時はホロドビッチ先生とJOCV担当。公開講座ではなく正規の授業なので欠席者には声をかけ、主任・中国語学科の先生にも相談したが、結局2名には出席意志がなくそのまま授業をすすめた。朝一時間目ということもあり、また、ホロドビッチ先生がほとんど授業に来なかったということもあるのだが、日本語の科目自体がよく話しあわれないうちに始まってしまったようだ。

一学期が終わる時に、欠席していた学生2名がサインをもらいにきたがサインをしなかった。が、こちらの大学の制度では、一人でも教師のサインがないと留年するというので、主任、ポポワさんと相談し、来学期からはまじめにするという約束のもとサインをした。

学習内容・・・日本語初歩L1～4

学生名1 オグニャン・・・出席せず。

2 エベリナ・・・ほとんど出席せず。時々出席してもひらがなを覚えていないので授業についてこれない。

3 ミレン・・・まじめで熱心。

4 ラドスティナ・・・とても優秀。

5 ペトコ・・・とても優秀。

1993年ソフィア大日本語学科(昼)の年間予定は以下の通り

前期・・・1/16～

テスト・・・1/20～2/13

休み・・・2/15～2/20

後期・・・2/22～6/3

*イースター休みがある。

テスト・・・6/6～7/5

集中講義7/1～7/23

追試・・・9/1～9/12

(h) ブルガリアの教育制度について

第18 高等学校業務報告と重複する部分があるかもしれないが、大学側からの情報によると以下の通りである。

幼稚園は3才からで、0才からの保育園もある。小学校は公立と私立があり、入学時の年齢は7才からでも8才からでも自由である。小学校(4年間)を終え中学校へ進むがこの時試験はない。4年間の中学を終え試験を受けて高校へ進む。試験のない高校もある。義務教育は8年間で授業料は無料である。高校には3年制、4年制がある。普通高校・職業専門高校は3年、語学専門高校は4年制である。奨学金制度は高校からある。大学は、普通大学は3年職業大学は4年制。国立大学は以下のとおり。

ソフィア大学(総合大学はここだけ)

経済大学
技術大学
芸術大学
俳優大学
医学大学
科学大学

私立大学で自由開放大学というのができたが、試験もなく仮教室のみで建物もなく学位も取れないのでは、、、という話である。実にいいかげんな話で、ほかの大学でも出席しなくとも卒業できるため仕事を持ちながら籍は大学に、、、という学生が多らしい。ソフィア大日本語科内だけで、出欠・ミーティング、、、とうるさいことをいってもなかなか定着しにくいのだろうと思う。

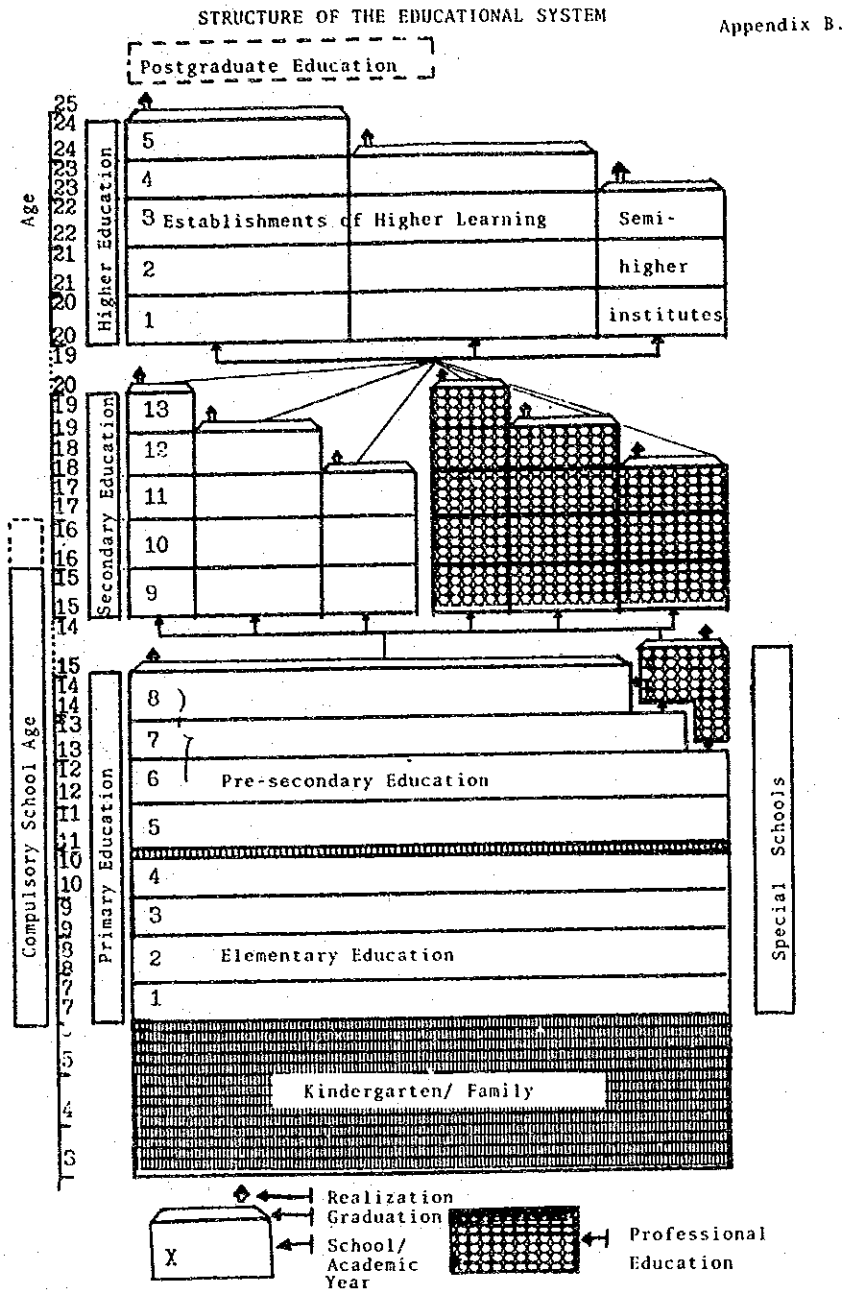
大学では教師に対する贈り物は花以外禁止されているが、小中学校では贈り物・コネが幅をきかせているらしい。



ソフィア大学本部

(i) 教育制度についての表

1992年7月の資料より。しかし、実際にはこの表の通りというわけではないので、理解を助けるための目安にしてほしい。





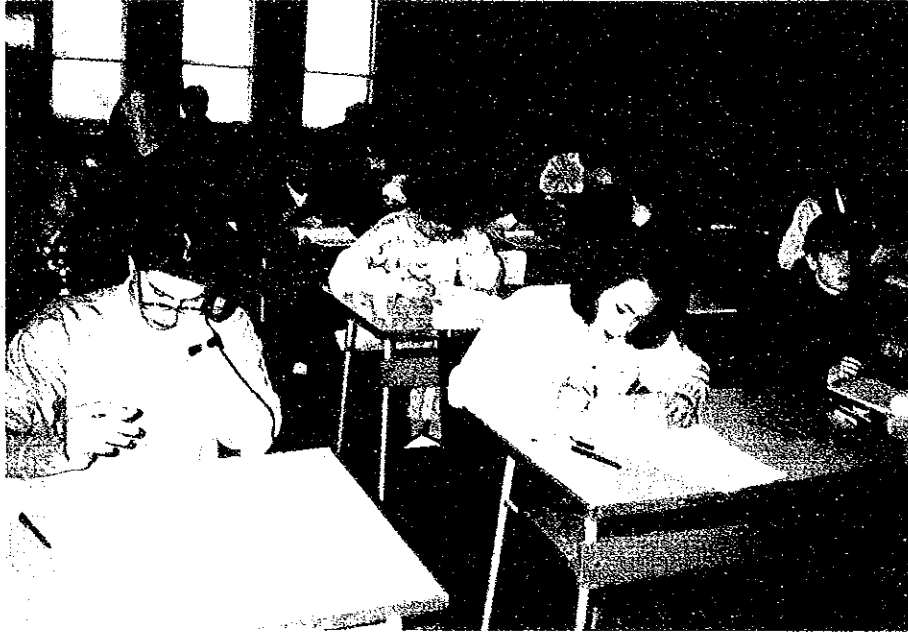
ソフィア大学東洋語学センター内部



ソフィア大学東洋言語センター



日本語講師室



ソフィア大学仮能力検定



茶道講習会



夜間1年



夜間2年

夜間旧3年



(2) ソフィア第18高等学校

ブルガリアの教育制度は日本と異なり、専門教育を含めると図式がやや複雑になる。下の表は日本大使館、及び教育・科学省からの資料を簡略化したものである。

年齢 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23

学年	初等教育 (義務教育)				中等教育			高等教育										
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	1	2	3	4	5	6	
	Elementary				Pre-Secondary													医学部
									実業学校			準高等教育						

義務教育は8年間で、全てのブルガリア人は無償で受けられることになっている。

この8年間の初等教育(義務教育)、3年間の中等教育、5年間の高等教育の8・3・5制がとられているが、学科によっては8・3・6制をとる場合もある。

初等教育は前期(4年-Elementary Education)と後期(4年-Pre-Secondary Education)に分かれており、後期より外国語学習を始める。

中等教育は普通校、専門学校、実業学校の3種に分かれ、語学を特に勉強したい者は入学試験(ブルガリア語と数学)に合格後、語学専門高校に進む。

ソフィア第18高等学校では初等教育の1年生から中等教育の11年生までの教育が行われている。日本語学習を始める生徒は初等教育課程の7年生にあたりプレパラトリ(予備)クラスと呼ばれている。生徒の年齢は13歳~15歳である。

1週間の授業時間数は、プレパラトリクラスと8年生が25時間、9、10、11年生が30時間であるが、そのうち日本語の授業時間数はプレパラトリクラスが19時間、8年生から11年生は週に8時間となっている。日本語の授業以外には体育、国語(ブルガリア語)、数学等の一般教科を学習するのであるが、他の語学高校においては8、9年生は科学、歴史、地理、生物等の授業を外国語で行うことになっており、日本語コースにおいても将来そのような充実した語学教育が行われることを学校側は望んでいる。

(a) 「ソフィア第18高等学校」

創立は1907年。現在の学校長はミセス・マリア・ヴァルチャノワで、学校の総責任者であると同時に物理の教壇にも立っている。

学生数は約1700、教師数は90(外国人教師は日本人、中国人、イラン人、シリア人、フランス人が各1名)。

この学校で行われている外国語教育は日本語、中国語、英語、ロシア語、フランス語、ドイツ語、アラビア語、ペルシャ語の8つである。

1年は前・後期の2期に分かれており、進級試験は学年末(5~6月)に行われる。まとまった休みは年に3回あり、年末から年始にかけて約10日、4月の初旬に約10日、そして6月中旬から9月中旬までの約3か月である。

教室の他に校長室、事務室、会議室、図書室、音楽室、保健室等があるが、日本の職員室のようなものは無く、教師は会議室におかれている出勤簿に記帳した後、直接教室に向かう。

生徒の出席は毎日必ず取り、出席率に関しては厳しい。

父母懇談会が年に数回あるが、授業参観のようなものは無い。

(b) 環境

ソフィア第18高等学校はソフィア市のほぼ中心にある。周囲には木が多く、学校の並びには小さな商店や喫茶店が続いている。

この学校では、初等教育課程の1年生から中等教育課程の11年生までの生徒が学んでおり、幼い子供から成人と見間違ふほどの青年までが顔を揃えている。

校舎は古く歴史があり、日本のそれと違って天井が大変高く、ドアが大きい。どの教室も黒板とチョークを使用しており、それも質の悪いチョークなので書きにくい。

校長、副校長共に女性で、校長の秘書も含めて英語は通じない。日本の学校のように総務を預かる事務員というのをおらず、学校に来る問題の殆どは校長が処理し、細々としたことは教師達が分担して処理しているようである。今回の短緊隊員の居住登録の手続きも、この高校の英語教師が同行して手伝ってくれた。

ブルガリア内の学校はどこも同じであるようだが、予算が無く、事務の人間を採用することや設備改善を含めて校長の理想とする学校作りにはまだまだ遠いようである。

この学校の生徒全員が一同に顔を揃えて校長の話の聞いたり、先生の紹介をしたりということが無いので、日本人や中国人の先生と廊下ですれ違ふと驚く生徒も多く、一度はベトナム人と間違われてベトナムコールをされたこともある。しかし、学校関係者は用務員も含めて大変親切で、特に校長先生にはとても可愛がっていただいた。他の先生方も気軽に声をかけてくれるのだが、英語の分からない先生方とは笑顔を交わすことしか出来ないのも、それは本当に残念だった。

日本語コースの生徒について言えば、皆実に熱心である。日本で言えば中学生の年齢の生徒達なのだが、強制的に日本語を勉強させられているという印象は全く無い。日本への関心は深く、また日本語についても上手に話せるようになりたい、もっと漢字を覚えたいという意欲が伝わってくる（勿論まだまだ子供なので飽きてしまったり、落ち着きがなくて手こずることもあるのだが）。大変人なつこく、生徒は先生にとにかくよく話しかけてくる。これは他のクラスでも同じようで、日本の中学の生徒と教師の関係を考えると、ブルガリアのこの点は羨ましいと思った。

(c) 授業活動報告

今回隊員が担当したプレパラトリクラスは2クラスに分けられ、17名が日本語を、残り半数の学生は中国語を学習していた。

日本語と中国語は昨年度（1992年9月開始）から新しく加えられた語学であるが、学校の一方的な計画だけが先走り、実際は教える教師がいないまま生徒を募集してしまったため、ソフィア大学の日本語講師が主に出張授業を行い、在ソフィアの日本人青年が会話の授業を担当することにして、大幅に遅れてスタートした。その大学講師が5月初旬まで通訳のアルバイトのために日本に行くことになり、その穴埋めとして短緊の隊員が急きょ授業を行うことになった。

授業は1日6時間あり、月曜日にブルガリア語、数学、体育の授業が、火曜日から金曜日までは日本語の授業のみ（22時間）行われた。

それまで授業は「日本語の初歩」を使って22課まで進められていたが引継ぎは無いに等しく、もう1人の日本人青年は日本語教育に関して素人であるため、それまでどのように文法整理、説明がされてきたのか皆目見当がつかなかった。

コースの開始が遅れた上に、ソフィア大学の講師は通訳のアルバイト等で授業を休みがちで、残る日本人青年が折り紙やゲーム等をして授業時間を潰すのに苦労したそうである。それにもかかわらず22課まで進み、文法等の定着度が比較的良かったのは、ソフィア大学の講師がブルガリア語で文法説明を全て行い、あとは教科書を丸暗記するという従来のブルガリア式外国語学習法に生徒がよく慣れているからだと考えられる。その講師の授業を見学した時も、本文を読んだり例文をあげる以外は全てブルガリア語で行われ、練習問題も分かる生徒が手をあげて回答し、分からない生徒は聞くことに徹するという状態であった。そのため日本語による説明に慣れておらず、教科書の3分の2を過ぎているというのに、教室用語や説明に必要な用語が入っていなかった。

隊員が授業を受け持つ間は生の日本語を聞くことに慣れさせ、聴解力と会話力をのばしたり、日本語の勘を養うように運びたいと思い、ペアカードを使ってドンドン発言させたり、休憩時間や帰り道に生徒と多く雑談をするようにした。初めは聞くことに慣れていないので何度も繰り返し話さなければならなかったが、何分こちらがブルガリア語が分からないので生徒も日本語を使うしかなく、また、子供らしい好奇心も手伝って殆どの生徒が積極的に話しかけてきた。

ソフィア大学の講師から、授業は復習を中心に行うようにとの指示があったが、彼らは実に暗記に強く、教科書の例文は殆ど頭に入っているので、応用を使った練習プリントや読み物を作成してやらせたり、アウトドアレッスンをを行った。また、授業を離れたところで日本語を使うきっかけとして、日本、モルジブ、シンガポールにいる隊員の知人を生徒の人数分選び出し、その知人宛に手紙を書かせたところ殆どが返事を貰え、現在も順調に文通を続けているようである。返事が届いた時の学生は大変な喜びようで、見ているこちらが思わず笑ってしまうほどであった。勉強としての日本語も大切であるが、彼らの年齢に合わせた日本語の楽しみを見つけてやることも必要であると感じた。

(d) カリキュラム作成

第18高等学校での授業の他に、教育・科学省に提出するための日本語コース5年間分のカリキュラム作成を依頼されている。

ブルガリアの高校における本格的な日本語教育というのは昨年この学校で始まったばかりで、第18高等学校の日本語コースは言わばモデルコースであり、今後このカリキュラムを使ってソフィア市内の他の高校、そしてその後は地方の高校でも日本語コースを設けて行きたいそうである。

5年間の日本語学習時間は下記の通りである。

プレパトトリクラス	19時間	×	34週間	=年	646時間
8年生	8時間	×	34週間	=	272時間
9年生	8時間	×	36週間	=	288時間
10年生	8時間	×	36週間	=	288時間
11年生	8時間	×	30週間	=	240時間

使用教科書はプレパトリクラスが「日本語初歩」、8年生が「日本語中級Ⅰ」を使用することになっているが、その上の学年については未定。

作業としては隊員がカリキュラム作成を行い、それを教育・科学省に紹介を受けた日本文化研究者であるブルガリア人がブルガリア語に訳し、消書したものを教育・科学省に提出する。

進行状況は、短緊の隊員がプレパトリと8年生のカリキュラムを作成し、現在それを前記の研究者がブルガリア語に翻訳中である。

参考までに、教育・科学省に提出した7年生（プレパトリクラス）の授業計画の概要を記す。

[年間授業計画]

①対象学年－7年生（プレパトリクラス）

②日本語授業時間数－週19時間×34週間＝年646時間

③使用教材－教科書「日本語初歩」（国際交流基金日本語国際センター）

④授業計画

第1週～第3週（準備期間－基礎構文、及び2種の文字導入）

ロシア語、あるいはドイツ語やフランス語のようなヨーロッパの言語に長い間親しんで来たブルガリアの生徒達にとって、遠く離れた日本の言葉を学習することは目新しく、且つ大きなチャレンジと言えるであろう。しかしながら基礎の段階から順序正しく、確実に生徒を誘導していけば決して日本語の上達は難しいことではない。書けて、読めて、話せて、聞き取れるという総合的な視野に立った上で日本語教育を進めて行くために、この準備期間を有効に使い、生徒達に日本語を学ぶための良い習慣を身に付けさせたい。

まず最初の3週間は教科書を使用せずに、日本語という彼らにとっての新しい外国語を大雑把に紹介し、これから行われる授業の説明、及び生徒にとっての効率的な勉強方法について注意を与える。そしてそれに引き続き、極基礎的な構文、名詞、数を導入する。板書に頼らず絵カードやアクションを多く用いながら日本語の音とリズムに馴染ませる。外国語を学習する時に初めに誤った発音、イントネーションの癖を身に付けてしまうとそれが後々まで悪影響を及ぼす。従ってこの時期は出来るだけネイティブスピーカーの自然な日本語を聞かせ、初めから自然な日本語のリズムを身に付けさせたい。また、授業は基本的に日本語だけで運営されることが理想であるので、必要な教室用語もこの時期に導入してしまいたい。

日本語の表記には漢字、平仮名、カタカナ、ローマ字、算用数字が使用されている。このうち学生の大切な学習となるのは漢字、平仮名、カタカナの3種の文字である。漢字は教科書で登場するに従って学習していくとして、学生の学習意欲の高いこの準備期間中に平仮名とカタカナを集中的に覚えさせてしまいたい。平仮名もカタカナもともに表音文字であるので、書いたものを声に出して読む、聞いたものを書いてみるなど、音と文字を結びつけながらこの時期に定着させてしまいたい。

第4週～第34週（教科書「日本語初歩」使用）

週計画

・文法、文型	10
・読み	1
・書き	2
・聴解	1
・会話	4
・テスト	1
計	19時間

以上の週計画は、ブルガリアに於ける外国語学習法の常識となっている文法訳読法を主体とするものではない。読解の授業では多読と速読を取り入れ、初期の段階では文字を早く正しく読み取る訓練を、後半は文章を早く読みながら意味をきちんと把握する訓練を行う。書き取りの授業では漢字を含めた文字を正しく表記する訓練を行う他に、ディクテーションを取り入れ耳から入って来た音をその場で書き表す訓練を行う。また、徐々に作文指導も行い、自分の考えを日本語を使って表現する訓練も行う。会話の授業ではロールプレイを利用して、学習した構文が自然に口から出るように、話すことに慣れる訓練を行う。その後シミュレーションやプロジェクトワークを取り入れ、何かを話して説明したり、完成させる作業を行う。毎週行われる小テストは学習してきたものをまとめ、学生の理解度を学生自身と教師が確認するためのものである。また、同時に日本語のテスト自体に慣れる目的も持つ。

教科書「日本語初歩」は全34課から成り、各課の内容により消化に掛る時間が若干異なると思われるが、難易度により各課を終える時間数を多少移動し、随時の復習も含めた上で1年間で全課修了するものとする。

教育・科学省からは12月までに9、10、11年生分のカリキュラムも提出して欲しいとリクエストがあったが、後任隊員（五年度1次隊）は8月いっぱい現地語学訓練があり、9月からの授業はプレパトリクラス及び8年生の2学年が同時進行するため多忙になることが予想されるので、その旨を告げ、とりあえずは9月中旬までに日本語コース5年間分のアウトラインを提出し、詳細についてはその後じっくり検討しながら決めて行くことを先日の校長との会議で承諾してもらった。教育・科学省と学校側は「日本語」を学習するだけでなく、日本語を使って例えば日本の歴史や文化、あるいは英語学校のように他の教科（数学等）を取り入れることを要望しており、そのためには教師や教科書など時間をかけてじっくり検討しなければならない、早急な決断は危険を伴う。他の語学コースのカリキュラムを調べながら、他の日本語教師も交えて進めて行く必要があるだろう。内容については隊員に全て任せられているので、仕事の負担が大きいと感ずる反面、全て自由に出来るので、意欲のある隊員には創造的なやりがいのある仕事でもある。

e) 問題点

まず絶対的に日本語をきちんと教えらるる教師が不足している。今年9月からの日本語コース（プレパトリクラス及び8年生）を考えてみても、2学年合わせて週27時間（カリキュラムの上では27時間だが、実際は30時間ぐらい教えることになる）あり、教師は3人と予定されているが、ソフィア大学の出張講師は休みがちで、その上来年早々国際交流基金のプログラムで数か月日本に行くことが決まっており、当てには出来ない。在ソフィアの日本人青年は日本語教授に関して素人であるため、ブルガリア語に翻訳はある程度出来るが、文法整理は難しい。そのため隊員が両学年分計画を立て、説明を行った上で彼に数時間預けるので、準備に相当な時間が掛かることが予想される。

前述のソフィア大学の講師については、確実に毎回授業を行ってくれるという当てもないので、高校側としては、もし日本から先生が次々来るのであれば授業は依頼しないとのことだが、だからと言って1つの学校に隊員が何名もまとまって入るのは賛成し難い。また、ここでブルガリア人の教師を除くということはブルガリアでは極めて画期的な完全な直接法に切り替えるか、あるいはこれまでブルガリア人教師が行って来た文法等の説明を隊員がブルガリア語で埋めるかしなければならぬ。どちらも協力隊の日本語教師にとっては挑戦的な試みではあるが、カリキュラム等の日本語コースの基盤が出来上がっていないだけに、正直言って不安が残る。特にこのコースが趣味の為の日本語コースではなく、高校教育のれっきとした必修教科であるので、それなりに責任を持って取り組まなければならない。そのソフィア大学の講師の他に高校で授業を行えるような教師はおらず、新たなブルガリア人の日本語教育者が育つまでにはまだまだ時間が掛かる。高校及び教育・科学省の我々に対する期待は大きく、その熱意につい押されてしまいそうだが、彼らの計画ばかりが先走らないよう、現場を知る隊員が冷静に判断していく必要があるだろう。

次に高校卒業後の学生の進路の問題がある。カリキュラムによると学生は高校5年間で1734時間日本語を学習することになり、相当なレベルに達するものと思われる。ソフィア大学日本語学科の1年生はプレパトリクラスと同じ「日本語初歩」を使ってまったくの基礎から日本語を学習しており、高校の卒業生がこのソフィア大学日本語学科に入学するとは考えにくい。生徒達に将来の希望を尋ねたところ、多くは日本の大学への留学を希望していたが全員が留学することは勿論出来ない。日本語は大学受験の科目には含まれておらず、高校で専門的に日本語を学習したところで将来どの分野に結びつくのか疑問である。正直言ってその点を教育・科学省もあまり考えていないようだ。今は新しい語学としてもはやされ始めたが、その点をブルガリアの教育関係者を交えて話し合っ行かなければならぬだろう。



ソフィア第18高等学校校舎



学生達(13~15歳)



(3) ヴェリコ・タルノヴォ大学

ソフィアから北東に240 km、かつて第2次ブルガリア王国時代(1187~1393)には約200年間にわたり首都であった地、ヴェリコ・タルノヴォ市(人口8万人)の一面にヴェリコ・タルノヴォ大学がある。

ヴェリコ・タルノヴォ大学はその正式名称を「キリル・メソジウス、ヴェリコ・タルノヴォ大学」とし、約3000人の学生が全国から集いこの地に学んでいる。理工系の学部はなく、文献学(PHILOLOGY)、史学(HISTORY)、地理学(GEOGRAPHY)、社会学(SOCIAL STUDY)、法学(LAW)、情報処理(INFORMATION PROCESSING)、芸術学(ARTS)の各学部から構成されている。なお文献学部とは概して自国と外国の言語、文化を主に学ぶ学部と理解すればよい。また便宜上「学部」と記しているが、これは日本の大学の学部と大学院課程が一体となったものであり、専攻科目と単位数により学士号、修士号が取得できる。学士号で5年、修士号で6年が一応の目安であるので、5年制の大学とすることができる。

以下、日本語教育が行われる文献学部の概要と日本語教育の概要について順を追って述べる。

(a) 文献学部の概要

文献学部はヴェリコ・タルノヴォ大学最大の学部であり、以下の11学課より構成されている。

- ・現代ブルガリア語学課
- ・古典ブルガリア語、一般およびスラブ言語学課
- ・ブルガリア文学課
- ・外国文学課
- ・ロシア語学課
- ・英語学課
- ・ドイツ語学課
- ・ロマンス語学課(フランス語、イタリア語、スペイン語)
- ・古典、東方言語学課(ラテン語、アラビア語、ギリシャ語)
- ・図書館情報学課
- ・教育学課

現在169名の専任教官がおり、そのうちの48名が教授、65名が博士号取得者である。なお本年度(1992年-1993年)は約2700名の学生が以下の専攻科目を学んでいる。

①文献学《取得可能学位-学士号、修士号》

1. ブルガリア語文献学
2. ロシア語文献学
3. 英語文献学
4. ドイツ語文献学
5. フランス語文献学

② 応用言語学《取得可能学位－学士号》

1. 英語及びアラビア語コース
2. 英語及びフランス語コース
3. ドイツ語及び英語コース
4. ドイツ語及びオランダ語コース
5. ドイツ語及び現代ギリシャ語コース
6. フランス語及びスペイン語コース
7. フランス語及びイタリア語コース
8. ロシア語及び英語コース
9. ロシア語及びドイツ語コース
10. ロシア語及び現代ギリシャ語コース
11. ロシア語及びウクライナ語コース

③ 教育学《取得可能学位－学士号》

1. ブルガリア語及び歴史
2. ブルガリア語及びロシア語
3. ブルガリア語及び英語
4. ブルガリア語及びドイツ語
5. ブルガリア語及びフランス語

④ 図書館情報学《取得可能学位－学士号》

1. 図書館学
2. 情報学

⑤ 日本語教育の概要

ヴェリコ・タルノヴォ大学における日本語文献学(JAPANESE PHILOLOGY)の設立は1992年5月25日の教授会で決定しており、1993年度(1993年10月より)正式科目として開講される予定である。以下、教授会での決定事項の骨子を順を追って述べる。

日本語講座の開設目的は通訳者、翻訳者の養成であり、“ブルガリア語－日本語”の通訳・翻訳のみならず英語も含めた3言語間の通訳者、翻訳者の養成という壮大なものである。

日本語の講座はまず応用言語学の「英語及び日本語コース」として開講される予定である。この「英語及び日本語コース」というのは、簡単にいえば“英語を主専攻とする学生の副専攻として日本語を学ぶコース”と理解すれば大差はないであろう。学習年数は他のコース同様5年(2セメスター制で10セメスター)である。既に具体的な時間配分が他の「英語及びフランス語コース」等に準じて決定しており、初年度の前期は日本語だけを週30時間、後期は英語を週16時間、日本語を週14時間学ぶという本格的なものであり、このカリキュラム実現に向けて私は直属の上司である文献学部部長プロフ氏よりすべてを一任されている。

私の仕事は実際の授業活動とそれに先立つテキストの選定、シラバスのチェックなど 時間配分、講座内容の変更を除くコースデザイン全般、教材の整備および将来ブルガリア人講師を採用する予定であるのでその指導も含まれる。

なお具体的な時間配分は別表の通りである。

また日本語文献学は当初、古典東方言語学課に所属するが、5年後の1998年まで日本語学課として独立することが予定されている。

現在私は1993年度の正式開講の準備として1993年3月初旬より5月下旬迄短期の

日本語講座を開講している。講座開講の目的は来年度の日本語講座の開講を具体的に知らせ、学内における日本語講座開設に対する反応を見ることと、来年度の正式開講を前に私にブルガリア人学生に対する教え方などに慣れさせるという大学側の意図がある。

学生数は約35名で大半が英語を学んでいる学生である。また4名ほど大学の講師も共に学んでいる。

クラスは2クラス、それぞれ週に4コマ（1コマ45分）の授業であるが、正式科目でもない、つまり単位にもならないにもかかわらず学生の学習意欲はこちらの頭が下がるほど熱心である。定員30名のところ受講者が多く、主専攻科目の成績順に受講許可を出したので学生が優秀なのは当然であるが、日本とブルガリアの地理的、経済的距離を考えると彼らの日本語に対する興味、情熱には目を見張るものがある。

授業の進行方法は短期であることを考慮し、学生の意見を聞き、あえて直接法にこだわらず英語を媒介にした授業にした。彼らのこれまでの語学学習法は媒介言語を使った授業で文法や意味を理解し、授業後暗記に専念するというもので、授業中に絵やカードで発話の練習をしながら実際に使える言語を身に付けていくというものではなかったからである。しかしながら実験的に直接法による導入や絵による文型練習を試みた結果、学生側にさほどの混乱もなく受け入れられた事を考えると、ごく初歩の段階から媒介言語を使ったハンドアウトを併用する形で直接法を用いれば、日本語教育独自の授業展開ができるものと思われる。来年度は英語の説明がある教科書を用い、直接法による導入、絵や実物を使った文型練習からタスクによる練習を通して生きた言語を学ぶ授業活動にする予定である。

さて最終日を残すのみとなった現在、約半数の学生が一度も欠席せずに受講しているが、彼ら全員が今回の短期集中講座の継続講座を来年度開くよう希望しており、幸いにして日本語講座は好評である。もちろん、講座の開講目的からして継続性はないのであるが今後、日本語学科が正式に独立すれば、ソフィア大学のように夜間社会人向けコースを創設する可能性もあろう。

以上ヴェリコ・タルノヴォ大学における日本語教育の概要であるが、日本語講座創設目的と講師に課せられている仕事内容を考えれば、新規のJOCV隊員には荷が重すぎるのは明らかである。あえていえば専門家の仕事であろう。なお私は主任講師として最低2年間、講座を担当することを強く期待されている。

以下、付加的な情報を記しておく。

・設備について

LL教室、ビデオ室などがあるが、授業科目のほとんどが語学である大学なので、週に一度使用できれば良いほうではないだろうか。一般の教室は何の問題もないが、講師として気になるのは黒板が小さすぎることである。（縦1メートル、横1メートル）

コピー機はあるにはあるが簡易の小さなもので、毎日の授業の使用に耐えられるものではない。他の印刷機はない。

また日本語講座とは直接関係はないが、学内にはブリティッシュ、カウンセル（英国）、ゲーテ・インスティテュート（ドイツ）、アリアンヌ・フランス（フランス）の図書室があり、いずれ日本語関係の図書室も、期待されている。

・外国人講師について

外国人講師は大学の性格上、多数在動しており、国名を述べるとアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、シリア、チェコ、ロシアなどである。

なおアメリカのPEACE CORPS 2名が英語講師として活動している。

・ 隊員受け入れに関して

大学側の隊員受け入れ状況はきわめて良く、私の仕事上また私生活上における問題に対し誠実に対応してくれている。

現在私は大学が提供してくれたアパート（大学から徒歩45分）に住んでおり、光熱費、家賃は無料である。

また医療は市内にある国立病院にて受けることができる。

・ その他

在ソフィア日本大使館からの情報として、香川大学の山田教授が毎年大学で行われているブルガリア語の夏期セミナーに参加したことで、山田教授と当大学とにおいて個人的なつながりがあり、教授の教え子である大学院生が来年度1年間当大学で日本語を教えたいという話もあるが、教授から当大学には何の連絡もないので今のところ不明である。

（以上 1993年5月記）

ソフィア大学や第18高校と異なり、ヴェリコ・タルノヴォ大学の日本語副専攻コースは今年10月に新たに正式科目として開講される予定であるので、文献学部長プロフ氏と協議し、3月下旬より6月下旬まで短期の日本語集中講座を開講した。この講座の目的は学内外に向けて来年度の日本語副専攻コースの正式開講を前に私にブルガリア人学生に対するクラス運営の方法などに慣れさせることであった。

学生数は約35名（男性12名、女性23名）で、この内4名が大学の講師であった。他の31名は全てヴェリコ・タルノヴォ大学の文献学部の学生であり、独語を主専攻とする3名を除く残り全員が全て英語主専攻であった。私はクラスを2つに分け、週に8時間（1コマ45分）授業を行ない、教科書「日本語の基礎1」（スリー・エー・ネットワーク）を「て形」（～て下さい）までを指導した。

既に内田、戸島両隊員（平成5年ブルガリア短期緊急派遣）がそれぞれの報告書で述べているように、当地における外国語教授法は教師がブルガリア語で文法説明、語彙、文の意味説明を行ない、学生は意味と文の形を理解し疑問点をなくした上で、暗記に専念するというもので媒介語を使った講義型のもので云えるが、学習対象である日本語は教科書の読みや例文の提示の時以外には発話されないため、結果として学生は理解力や暗記力にすぐれ、学んだ文章を使って他者に働きかけるといった会話力やコミュニケーション力に欠けていたので、その点を考慮しこれまでの方法にとらわれない形で実験的に種々の方法を試み、今後の資料とした。

教授法は学生の意見を取り入れ、これまでの彼らの外国語学習法に合わせて、当初は媒介語（英語）を使用し、学生の理解語彙、文型が増えるに従って日本語の使用を増やしたところ、危惧していた様な拒否反応もなく、むしろ日本語を聞き理解することを楽しんでいったようであった。又、絵と日本語だけによる新文型の導入や簡単なゲームの中で新しい表現を提示してみたところ、驚きと共に速やかに受け入れられた事を考えると、授業前あるいは授業後にブルガリア語で書かれた文法の簡単なハンド・アウト・プリントを配り、学生に確認させてやれば、授業中は日本語のみで行なう（修正の）直接法が受け入れられる要素は充分にあると思われた。

練習は単語レベルから文レベルへとまず発音練習を行ない、学生に日本語を発話することに対する恐怖感を取り除いた後、形容詞や動詞の活用又文の形を作る練習をし、身につかせた後、文脈がはっきりと分かる絵などを他の教科書から選び出し、発話される場面を充分理解させてから文を作り発話させる練習を行なった。又発話回数を増やすために学生をペアにし上記のような絵をカードにして練習させたが学生にとって初めての体験でもあり、直接法での文型の提示の場合と同様多少の戸惑いはあったものの受け

入れられた。又聴解力を養うため他の隊員に協力を求め、簡単な会話を録音し聞かせた後、簡単な語句の入れ換えなど学生同士で発話させる回数を増やしたりしたが、学生それぞれに簡単な役割を与えて考えて発話させようとしたが、理解文型、語彙が少ないこともあり難しさを感じた。

又、表記に関しては短期でもあり、かなと漢字の概念を説明し、教えるのはひらがなのみとし、カタカナは新出語が出るたびに提示するにとどめ、体系的には教えなかった。ひらがなは音と文字の形と絵をミックスさせて教えたが反応はよく、定着度も良かった。又文字学習は単調になりがちであるので、文字の一部をカードで隠し、推理させたりして興味の持続をはかった。

この短期集中講座の結果、ブルガリア語で説明した語彙、文法のハンド・アウト・プリントを配り、教師のコントロールが強い形の練習方法を用い、そして会話の基本パターンを発話させることに慣れさせれば、会話力もつき直接法での授業も充分可能であると思われた。

ほとんどの学生が一度も欠席せず、最後まで参加した学生全員が講座の継続を求めて来た程、学生は日本語に興味を持っておりそのまじめな性格さゆえ、しっかり教えれば日本の国外で学んだとは思えない程の実力がつくと確信した。

短期集中日本語講座以後は、今年10月の日本語副専攻コース開講に向けて準備している。まずソフィア大学日本語学科の水上氏（国際交流基金・日本語専門家）やホロドヴィッチ氏などの協力を得、ソフィア大学日本語学課のカリキュラム、進度、使用教材、問題点などを伺い、それを参考に教科書の選定作業から着手した。

教科書は当初「JAPANESE FOR EVERYONE」（学研研究社）という、かなりコミュニケーションを意識したものを使用する予定であったが、水上氏の助言もあり、翻訳者、通訳者を養成するというコースの性格上しっかりとした日本語の土台を築くものとして、文型積み上げ型の「初級日本語」（東京外国語大学、留学センター編、三省堂）を採用した。ソフィア大学や第18高校で使われている「日本語初歩」（国際交流基金）と較べシラバスが似ており、ブルガリアで毎年実施している「日本語・日本文化研修留学生試験」（文部省）や「日本語成績優秀者研修試験」（国際交流基金）を意識したものであり、「日本語能力検定試験」（国際交流基金）も考慮した。

現在私が行っているのは、この主教材を直接法で使用するにあたり必要と思われる補助教材の作成とコース全般（一年目）のデザインである。

具体的には以下の3点である。

①語彙リスト—ブルガリア語版の作成

②教科書に準拠した例文集をかねた文法解説書（ブルガリア語）の作成

③教科書に準拠した、かな指導用小冊子の作成

語彙リストはヴェリコ・タルノヴォ大学の英語課講師に協力を求め私が意味の取り違えが起こらないように語彙の使われ方を英語で説明し、ブルガリア語訳化しているものである。

例文集を兼ねた文法解説書は「初級日本語」の文型・文法事項の提出順に各種の文法解説書「A DICTIONARY OF BASIC JAPANESE GRAMMAR」（THE JAPAN TIMES）「日本語初歩・文法説明」（北海道大学）「GRAMMATICAL NOTES」（JICA）などを参考に学生に誤解を与えないことを充分考慮して、一から英文で解説を書き、教科書とブルガリアの現状に合った例文を加えたものであるが、作業の性格上かなり時間がかかっている。英文解説と基本例文は今月末までに仕上げ再検討を加えながら、ブルガリア語訳化する予定であるが、私はこれを単なる文法プリントではなく例文集として、またブルガリア語との違いを明示する簡単な比較文法書として、上級学年において翻訳、通訳を学ぶ時の為の礎にしたいと考えている。10月以降は授業活動を行ないながら、説明文の手直し例文

の書き換えなどをし、又学生の意見も取り入れて、直接法で行われる授業の手助けとして余りあるものにしたと思っている。またこれは他の隊員にとっても十分な参考資料になると考える。

かな指導用の小冊子は「初級日本語」の前半に出てくる語彙を使い、読み書き音声を指導するために文字を絵と、絵が表す音を使って記憶に結びつける「HIRAGANA IN 48 MINUTES」(CDC)などを挿入し、文字のバランス感覚を養う為の十字の補助線を練習用のマス目に加え、提出語彙の無駄を省こうとするものである。

以上が作成中の主な補助教材であるが、その他に実際の教室活動で練習をする時に必要となる絵や教室活動案を他の教科書類から収集し、漢字を図形としてとらえさせる方法などを合わせて検討している。

コースデザインに関しては、実際の学習進度が可能であるのか今の段階では把握できないので、柔軟性をもって考えているが、ファースト・セメスター(第1学年、前期)は、先に述べた様に日本語の土台を築くものとして「初級日本語」を主教材とし、聴解力や会話力を養う目的で「楽しく聞こうⅠ・Ⅱ」(文化外国語専門学校)「にほんごきいてはなしてⅠ・Ⅱ」(THE JAPAN TIMES)の中から無理のないものを選び使用する予定である。又主教材のテープが市販されておらず現在、東外大付属日本語学校(留学生センター)に録音テープの提供をヴェリコ・タルノヴォ大学を通して行っているのであるが、入手不可能な場合、テープ抜きで会話の授業を行なうことになり、現在対策を講じている。また漢字に関しては、主教材の提出漢字は600であり初級としてはかなり多いので、学生の負担にならぬよう、一日に学習する漢字数を6字とし、毎日小テストを行なうことで定着化を計りたい。尚この主教材の漢字学習はセカンド・セメスター(第1学年、後期)まで継続される。(図1)

別表の通り、ファースト・セメスター(第1学年・前期)週当たり30コマ(22時間30分)計、450コマ(337時間30分)で副専攻の日本語だけを学習する期間なので、準備の点で教師に、理解し記憶するという点で学生に、それぞれ負担が大きいので、週6日間(月曜日から土曜日まで)とし、一日当たりの学習時間を5コマとした。

かな導入後の週間カリキュラムは図2の通りである。

セカンドセメスター(第一学年・後期)では主専攻科目に多くの時間を取られ、日本語は週当たり14コマ(10時間30分)計、210コマ(157時間30分)とカリキュラム上はなっているが、初級を終え中級への橋渡しとなるこの時期を重視し週当たり24コマ(18時間)一日当たり4コマ(3時間)を学習時間として考えている。主専攻科目との兼ね合いもあり、現在の段階では何とも云えないが、学生の同意を得た上で、学部長プロフ氏と協議していきたい。

この時期の主教材として、現在の日本社会を題材に取り上げている「総合日本語・初級総合」(アルク)と「総合日本語初級から中級へ」(凡人社)を予定している。また「ヤンさんと日本人々Ⅰ・Ⅱ」(国際交流基金)を単なる聴解教材や文化紹介の材料にせず、見て聞いた情報をもとに自分の意見を述べる為のディスカッション教材にすることを考えている。加えてこの時期に足腰の強い日本語力を身につけさせるため、読解を重視している。主教材の他に、適当なものを、と現在検討中である。作文は主教材を発展させる形で、現在の日本やブルガリアの社会問題や社会現象など、問題意識を持たせて指導する予定である。漢字については、「初級日本語」を学習後、主教材の語彙で既に学習定着済みのものを無理のない形で与えて行く予定である。

ともあれ、ソフィア大学では夏休みに一ヶ月の学習期間を設け「日本語初歩」を一年かけて終える進度であるので、ヴェリコ・タルノヴォ大学においても学生の反応を見て「初級日本語」をセカンド・セメスター(第1学年、後期)の半ばまで使用することも充分考えている。又、両セメスターにおいて、主教材の定着度をみて再検討することに

している。最後にコースの問題点に少しふれておきたい。最大の問題はやはり教師の不足なのであるが、次の案を土台に学部長プロフ氏と協議していくことにしている。一つは「日本史と日本文化」「日本文学史」などの専門科目をソフィア大学より客員教授として招き集中講義又は週一日の講義として開講する。(他の科目で行われている。)それに加えて、新入生の受け入れをソフィア大学日本語学課と同じように隔年にすれば「日本語」科目をJOCV2人体制で充分運営していくこと可能である。私は大学側から日本語コースに関するコースデザイン全般とその実際の運営に全ての権限と責任を任されているが、今後はシニアを派遣し、大学との交渉、カリキュラムの作成、補助教材の整備、教室活動の質の維持を計り、新隊員はシニアの元で担当分野の指導に専念するのが理想である。

(図1 - 第1年次年間カリキュラム 概略図)

	前期 (ファーストセメスター)	後期 (セカンドセメスター)
主教材	「初級日本語」	「初級総合」 (初級から中級へ)
表記	かな小冊子 初級日本語漢字練習帳 I II	主教材に準拠したものを作成
聴解	楽しく聞こう I II	ヤンさんと日本の人々 I II
タスク活動	きいてはなして I II	検討中
読解		読解20のテーマ

(図2 週間カリキュラム概略図)

	月	火	水	木	金	土
8:00	新出語彙、新出文型の導入・練習					
11:00	聴解、タスク活動、会話 -各2コマ					
12:00	主教材の会話、漢字					
2:00						

別表 ヴェリコ・タルノヴォ大学における日本語教育の科目名と時間配分

2 セメスター制（前後期制－各期15週）

科目名	セメスター									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
#総授業コマ数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
↓										
1、日本語 → # 1 5 6 0 ｺﾞ	450ｺﾞ	210ｺﾞ	150ｺﾞ	150ｺﾞ	120ｺﾞ	120ｺﾞ	120ｺﾞ	120ｺﾞ	120ｺﾞ	90ｺﾞ
2、日本史と日本文化 → # 6 0 ｺﾞ			60ｺﾞ							
3、翻訳 → # 1 8 0 ｺﾞ								60ｺﾞ	60ｺﾞ	60ｺﾞ
4、日本語文法 → # 1 2 0 ｺﾞ					60ｺﾞ	60ｺﾞ				
5、日本学史 → # 1 2 0 ｺﾞ							60ｺﾞ	60ｺﾞ		
6、個別課題：翻訳（詩、小説） →									△	
7、個別課題：翻訳（経済書） →										△
8、翻訳練習 # 4 週間（セメスター6か8のあと）										

2 柔道

ブルガリアの柔道について

ブルガリアの国内には現在40の柔道クラブがあり、最も盛んな地区は首都ソフィアである。次いでプロブディフ、ルセ、スタラザゴラの順である。通常は各クラブ単位で練習を行っており、この国で柔道は子供から大人まで幅広く親しまれている。

(1) ブルガリア柔道連盟

当地で本格的に柔道の指導が始まったのは、1947年のことで、この時の連盟はブルガリア体協から認可されていなかった。「ブルガリア柔道連盟」が単独で認可されたのは1968年のことである。1970年代後半から1980年代後半はブルガリア柔道の黄金期で、オリンピックを始め世界選手権、ヨーロッパ選手権など大きな大会で多数のメダルを獲得している。現在の連盟の名称は「ブルガリア柔道&柔術連盟」となっているが、これは、1990年10月にフランスより柔術指導者が来ブした際、「ブルガリア柔道連盟」の名称に柔術の名称を加えた方が良いのではないかとアドバイスされ、同年12月から現名称になった。

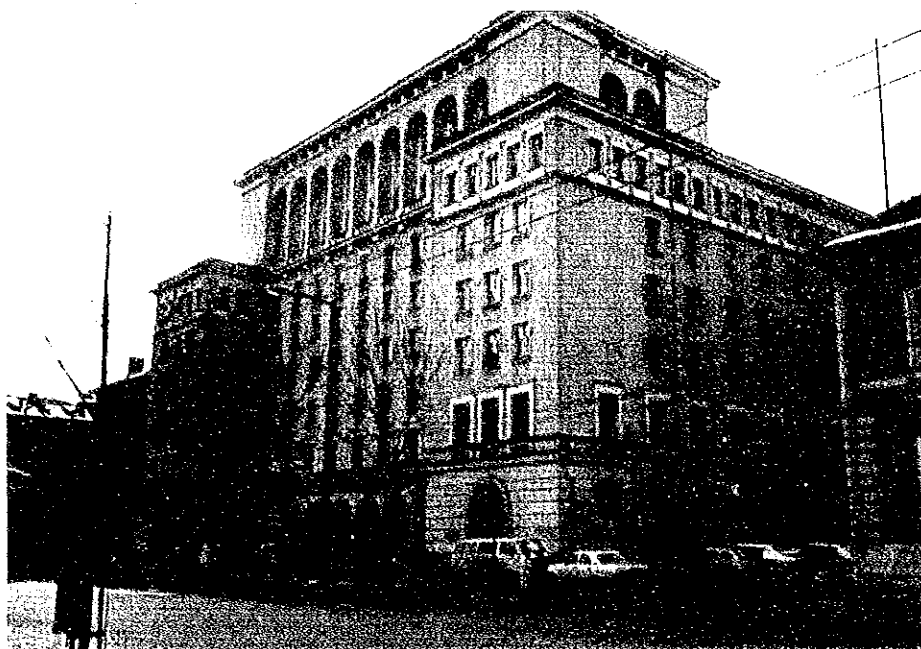
短期緊急派遣隊員の2名はこの連盟に所属しており、各クラブの巡回指導を始め、各大会の同行、合宿での指導、デモンストレーションなど連盟を通じて行っている。

尚、現在連盟の役員及び事務局員、連盟住所は下記の通りである。

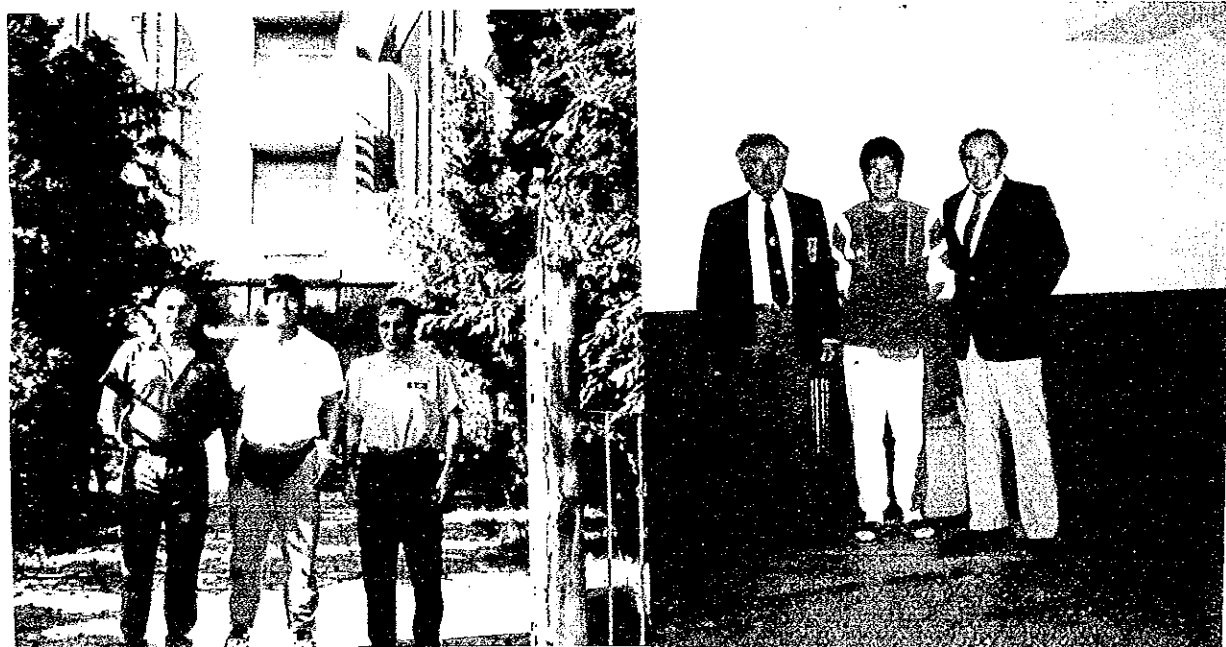
会長	スヴェトスワフ・イワノフ	(現スポーツ・アカデミー教授)
事務局長	アッセン・コロジエフ	(総轄事務)
事務局次長	パラメン・パラゾフ	(総轄事務)
事務局員	ラットカ・ストエバ	(タイピスト)
審判部長	ツベタン・ハジエフ	(国際A級審判)

ブルガリア柔道&柔道連盟住所

Bulgarian Judo and Ju-jitsu Federation
75 Vasil Levski Blvd. Sofia, BULGARIA
TEL: 865312
FAX: 879670



ブルガリア柔道・柔術連盟が所属するブルガリア・スポーツ連盟



ブルガリア柔道・柔術連盟の役員及び事務局員。
左からパラゾフ氏、佐藤隊員、コロジエフ氏、ハジエフ氏、山本隊員、イワノフ氏。

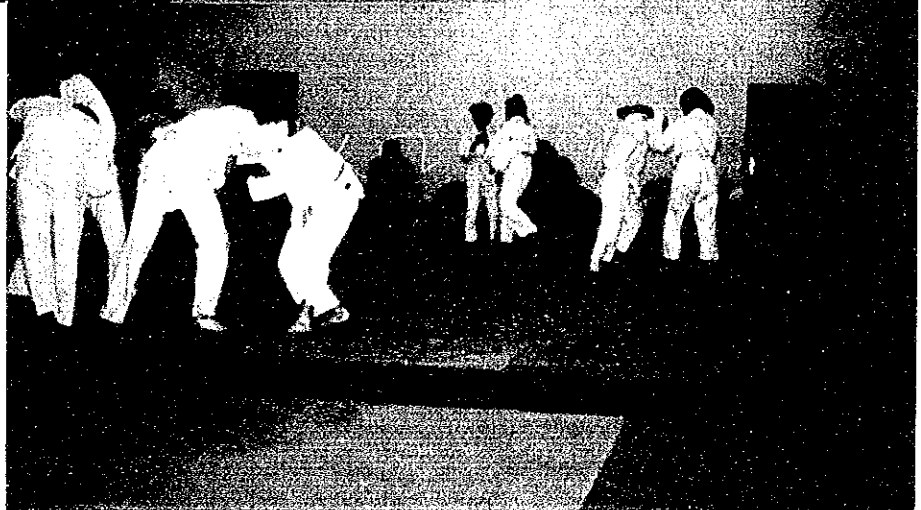
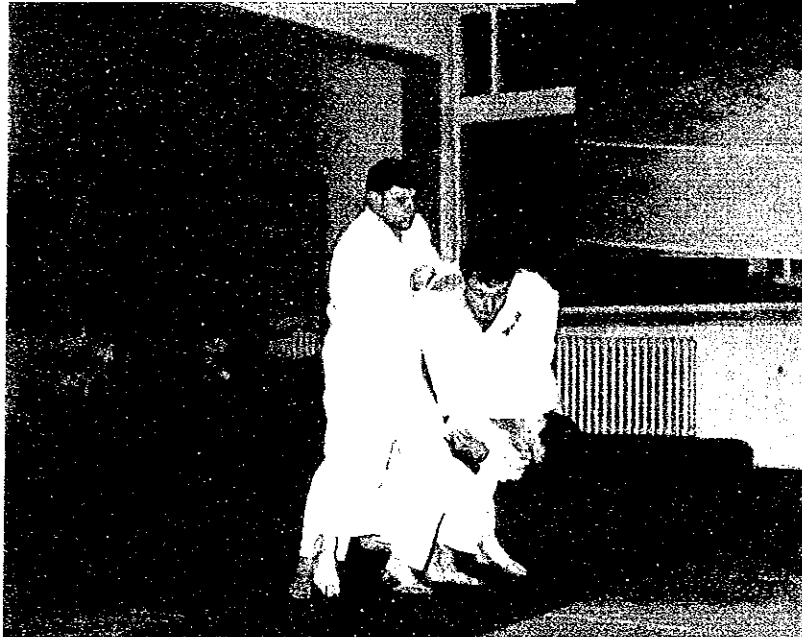
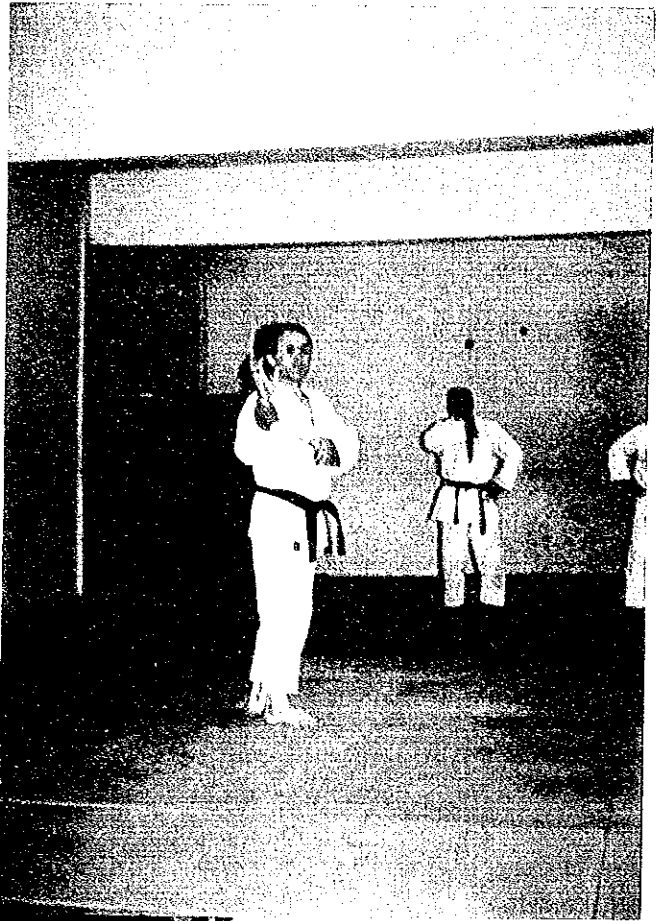
(2) クラブチーム

各クラブにはそれぞれの母体がある。体育学校、体育大学、大学、国鉄、地区のスポーツクラブ等で、各クラブのコーチへの給料はそこから出ている。

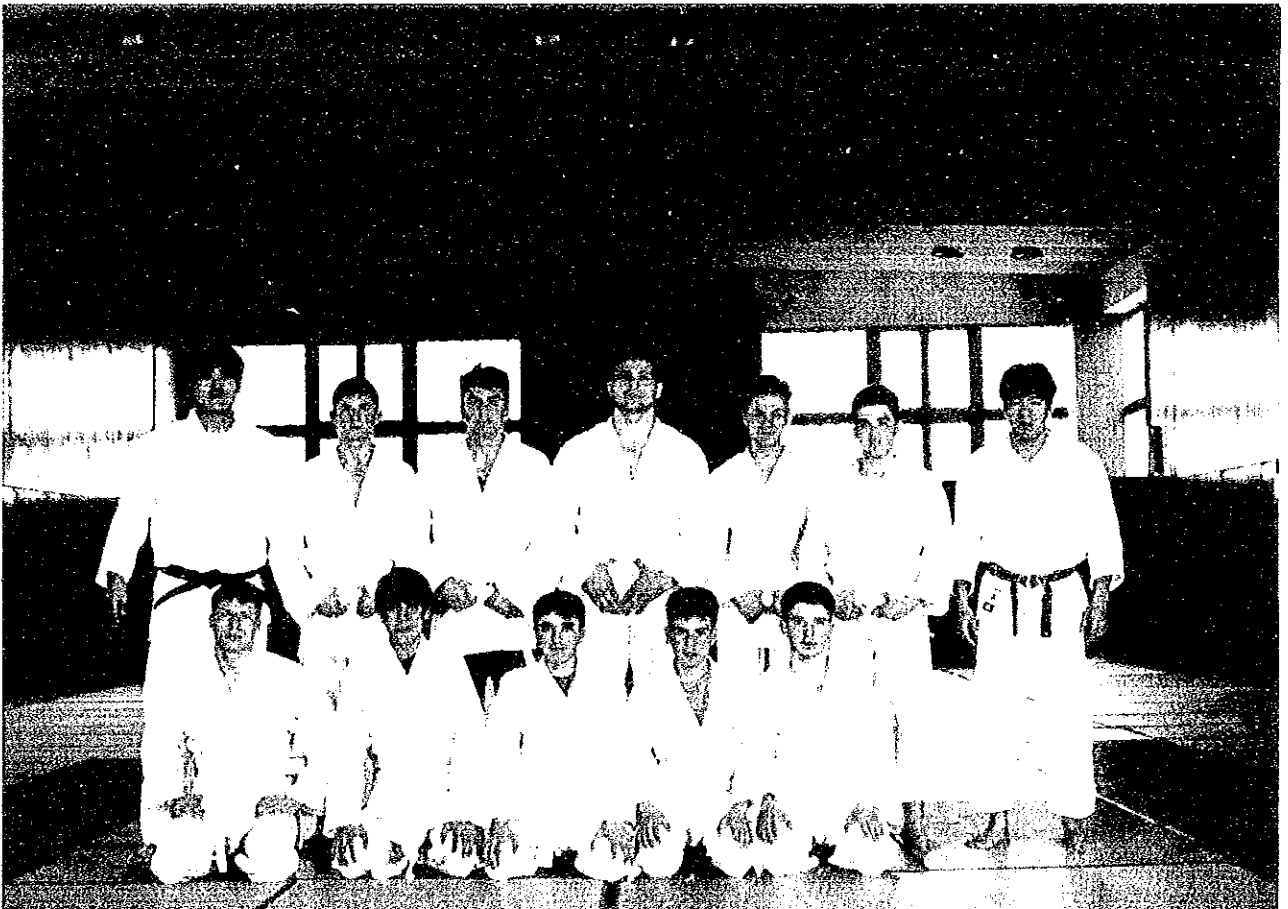
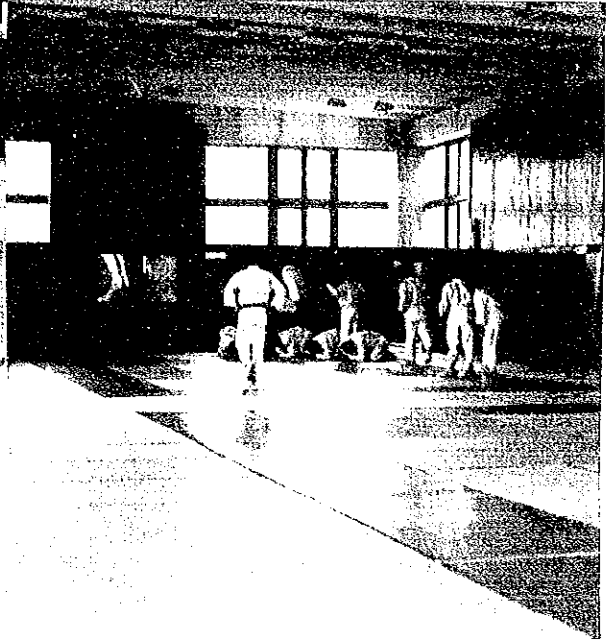
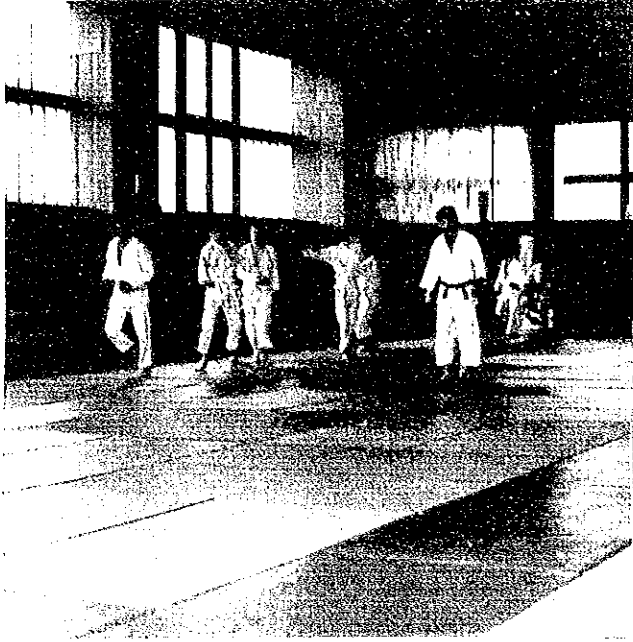
これまで、ソフィア市内に9つある柔道クラブのうち5つの柔道クラブを巡回指導してきた。選手の中にはレベルの高い者もいる。皆、熱心に練習しており、短髪隊員もやりがいを感じる。地方のクラブからも指導の要請が多くあり、地方への巡回指導を行う予定であったが実現には至らなかった。今後延長が決まっている山本隊員がこの地方巡回指導を行う予定である。尚、これまで巡回指導した5つのクラブの詳細は下記。

クラブの名称	コーチ名	部員数	練習時間
ナショナル・スポーツ ・アカデミー（体育大学）	アンゲル・ボジチコフ	18名	平日の午後 4:30～6:30
レフスキースパルタック 柔道クラブ	ルーマン・ミンチェフ	20名	同上
ディアナバット ・スポーツクラブ	ディミタル・ザブリアノフ	12名	平日の午前 11:00～12:30
ツェシカ ・スポーツクラブ	シネオン・チェネフ ボイチェフ・ボヤノフ	16名	平日の午後 4:30～6:30
ソフィア大学柔道クラブ	エミール・プロコポフ アンジェリーナ ・プロコポフ	24名	平日の午前 10:00～12:00 平日の午後2:00～ 4:00と4:00～6:00

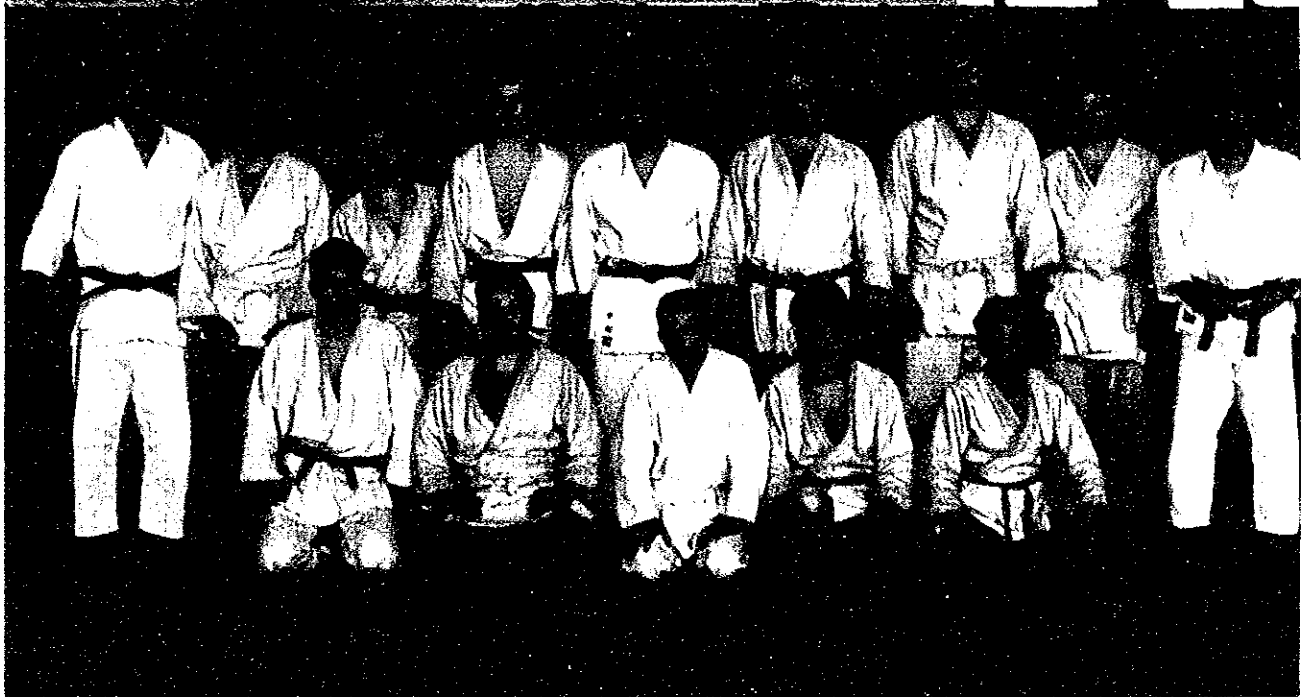
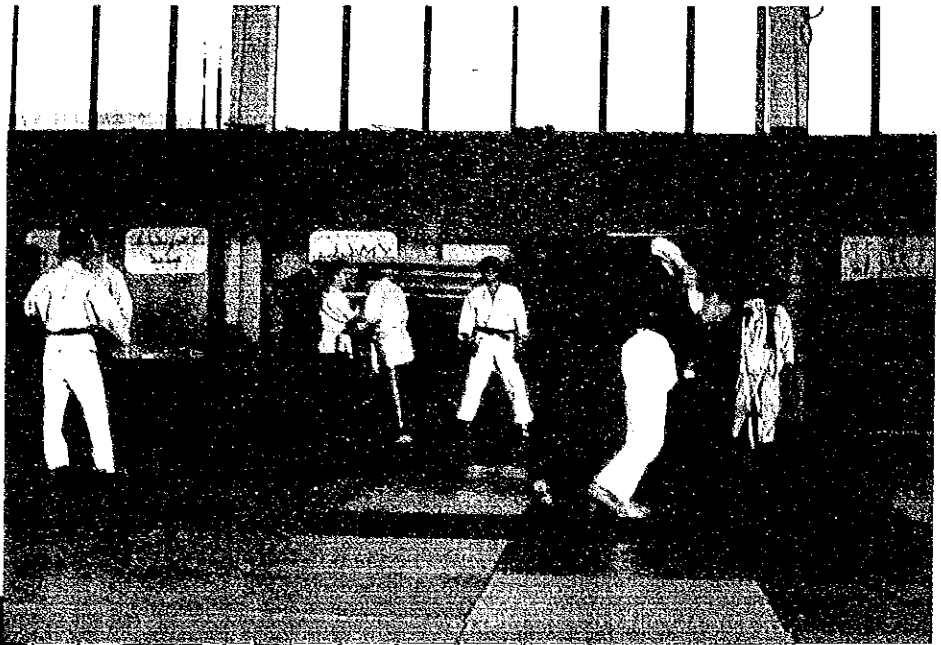
ナショナル・スポーツ・アカデミー



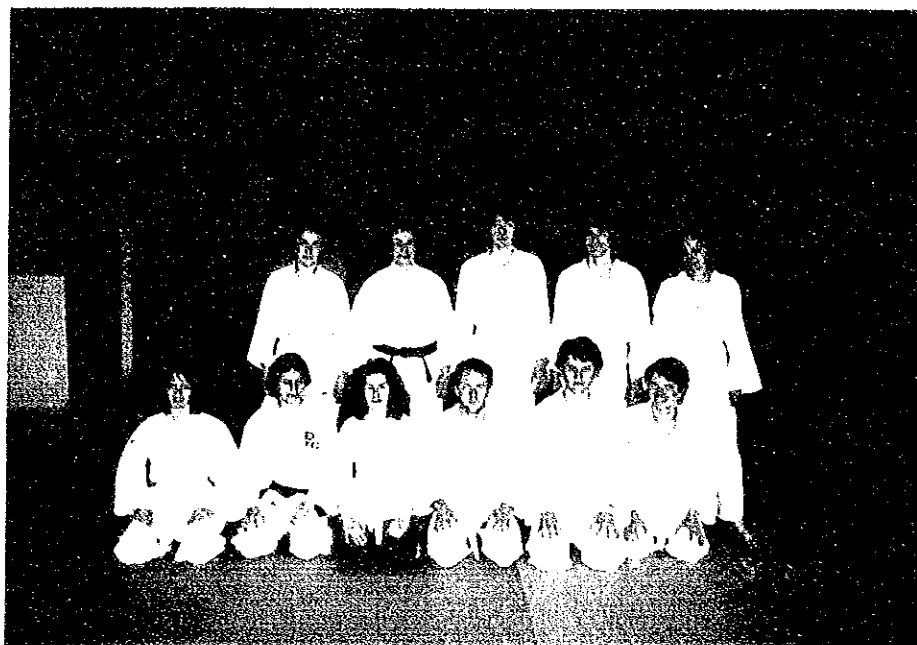
ディアナバット・スポーツ・スクール



ツェシカ・スポーツクラブ



ソフィア大学柔道クラブ



(3) ナショナルチーム

毎年4月に、ブルガリア体重別選手権大会が行われこの大会の上位入賞者から、ナショナルチームのメンバーが構成される。本年度は、男女各階級より12名が選ばれた。昨年は8回の合宿が行われたが、今年は資金不足の為、現在まで4月14日～26日の一度しか行われておらず、今後は世界選手権大会に向けて8月12日～30日と9月6日～25日の2度を予定しているのみである。因に、今年行われた合宿に隊員はコーチとして参加した。尚、この合宿はアテネで行われたヨーロッパ選手権の為の合宿でありそのヨーロッパ選手権にも隊員はコーチとして同行する機会を得た。また5月22～23日にイスタンブールで開催された、トルコ国際柔道大会にブルガリアチームも参加し、隊員はこの大会にもコーチとして同行した。この二つの大会のレポートに関しては別紙参照のこと。

(4) 国際大会と国内大会

ブルガリアが参加している国際大会は以下の通りである。

- ・オリンピック
- ・世界選手権大会
- ・ヨーロッパ選手権大会
- ・世界学生選手権大会
- ・嘉納杯
- ・ルーマニア国際大会
- ・チェコ国際大会
- ・ポーランド国際大会
- ・ハンガリー国際大会
- ・トルコ国際大会ほか国際的ジュニア大会等

ブルガリア国内で開催される国際大会

- ・ブルガリア国際大会（毎年2月に行われるが今年は資金不足の為中止）
- ・ブルガリア国際少年柔道大会（別紙クルモブラド国際少年柔道大会参照）
- ・ブルガリア国際ジュニア柔道大会（男子及び女子）

国内大会

- ・ブルガリア柔道体重別選手権大会（別紙参照）
- ・ブルガリア年齢別体重別柔道大会（別紙参照）
- ・ブルガリア柔道男子団体大会
- ・ブルガリア学生柔道選手権大会（団体戦、個人戦）
- ・ブルガリアスポーツスクール柔道大会（別紙参照）

*隊員がこれまで同行した大会については別紙大会報告書参照。

文化無償豊配布状況

(1993年6月30日)

No	DESCRIPTION	QUANTITY	備考
1.	Super Judo mat official Kasumi set of green and red coloured mats	10 sets	① 9ヶ所配布
2.	Scoreboard	20 sets	②
3.	Judo mat truck and storage carrying cap. for 22 mats	10 units	ブ柔連保管 9ヶ所配布
4.	Stopwatch	40 pcs	ブ柔連保管
5.	Judo uniform set Coat, pants & white belt per set Cotton 100% double swen Kodokan official marked size: W - 2 size: W - 3 size: W - 4 size: W - 5 size: W - 6	60 sets 60 sets 60 sets 60 sets 60 sets	ブ柔連保管
6.	Red & white flag for judges	20 sets	ブ柔連保管
7.	Yellow & blue flags for timer	40 sets	ブ柔連保管
8.	Red & white belt	60 sets	ブ柔連保管
9.	Under laying mat for 98 Judo mats(arena required length 230m)	10 sets	9ヶ所配布
10.	Time signal	10 units	ブ柔連保管

*① 9ヶ所配布先は、ナショナル・スポーツ・アカデミー、レフスキー・スパルタック、ソフィア大学柔道クラブ、ディアナパット・スポーツ・スクール、スパルタック・プロブディブ、プロブディブ・スポーツ・スクール、ブラツァ・柔道クラブ、スタラザゴラ・柔道クラブ、ルセ・柔道クラブ
(ディアナパット・スポーツ・スクールには、2セット豊を配布。その他のクラブは1セット配布)

②ブルガリア柔道&柔術連盟事務局保管

活 動 表

	大会	活動	その他
2 月	大会なし	<ul style="list-style-type: none"> ・着任後、一週間は挨拶回り身の回りの整理 ・2月25日より柔道の指導を開始 ナショナル・スポーツ・アカデミー 	<ul style="list-style-type: none"> ・住居を選定及び引っ越し
3 月	<ul style="list-style-type: none"> ・クルモフ・グラド少年柔道大会（隊員同行） ・スポーツスクール柔道大会（隊員同行） ・ルーマニア国際柔道大会 ・ポーランド国際柔道大会 	<ul style="list-style-type: none"> ・クルモフ・グラド少年柔道大会にて佐藤、山本隊員デモンストレーションとして投げ技の指導を行う ・スポーツ・アカデミー、に続きレフスキー・スパルタック柔道クラブ、チェシカ・スポーツクラブを指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・特に無し
4 月	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢別体重別柔道大会（隊員同行） ・ブルガリア体重別選手権大会（隊員同行） 	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツアカデミー、チェシカ・スポーツクラブ、ディアナパット柔道クラブの各クラブを指導 ・ナショナルチーム合宿 	<ul style="list-style-type: none"> ・文化無償援助の畳配送の立会い
5 月	<ul style="list-style-type: none"> ・ヨーロッパ選手権大会（隊員同行） ・トルコ国際柔道大会（隊員同行） ・年齢別体重別柔道大会プロブディフにて（隊員同行） 	<ul style="list-style-type: none"> ・文化無償援助のドネーションセレモニーにて投の形のデモンストレーションを行う ・ソフィア大学柔道クラブ指導 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハンガリーにおいて中間報告会議
6 月	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢別体重別柔道大会（隊員同行） ・ハンガリージュニア国際柔道大会（隊員同行） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ペルニツ市において投の形のデモンストレーション 	<ul style="list-style-type: none"> ・文化無償援助の畳配置の確認
7 月	<ul style="list-style-type: none"> ・試合無し 	<ul style="list-style-type: none"> ・最終報告書作成準備 	<ul style="list-style-type: none"> ・事務局医鳴戸先生来ブ ・山口調整員着任 ・高橋隊員（5-1）着任

柔道関係の新聞記事

бора на
игра с 3:1
Българи
ртуозна
м Очу бе
щата си с
Терон от
улесни
дната си
е и 3:2 за

ревишо -
3:1. Модер-
онара 1:3.
же Парма
Ровена 3:4,
ю 24, Фал-
10, Рим 8,
на с по 44,
Перуджа,
звани с по
иш, Реджо
Сан Подза-

ИКО.ЮВА

ната кутия и някой лев (!!!)

ДЖУДО

Японци в Крумовград

КРУМОВГРАД, 4 март. Завърши IV традиционен турнир по джудо за момчета и момичета, в който участваха четири отбора при двете възрастови групи. Това стана благодарение на спомоществателите от община Крумовград и обувния завод „Хан Крум“. Естествено, голям дял за блестящата организация имаше и председателят на

клуба „Левски“ Николай Танев. С внимание бяха посрещнати и двамата японски специалисти – Ямамото (IV дан) и Саго (III дан), изпратени тук за да окажат спортно-техническа помощ на българските треньори и състезатели.

Победители: момчета: 34 кг А. Топалиев (Сп Пд), 38 кг Ст. Иванов (Сп Пд), 42 кг Ст. Иванов (Сп Пд), 46

кг В. Асенов (Крумовгр), 54 кг Г. Чобанов (Сп Пд), 70 кг Ал. Христов (Сп Пд); момичета 34 кг М. Сотирова (Тополовгр) 38 кг Н. Маринова (Дун Рс), 42 кг Ив. Никова (Сп Пд), 46 кг Ал. Кераванова (Тополовгр), 50 кг Н. Балева (Тополовгр), 54 кг Н. Илиева (Сп Пд), 66 кг М. Мутафчийска (Сп Пд).

ПЛАМЕН ПАЛАЗОВ

ПЛУВАНЕ

Парите без знаят

Утре в басейна палата ще се състои национален турнир за парите на банката. На него участват най-добрите мъже и жени от великански шампионски басейни, който на миналия месец. Този път обаче доста по-интересни са стартите. Турнирите стил: гръб, брус, бр. стил. Петнаесет

„Булстрад“ АД е новият

3月6日24チェサ紙に掲載

ДЖУДО - „БОСФОРСКА КУПА“

Три пъти български бронз

От участие в международния турнир „Босфорска купа“ за мъже и жени от Истанбул се завърнаха състезателите от втория ешелон на националния ни отбор. Както научихме от съюзния треньор Пламен Палазов, състезанието е било много силно. Представени са били школите на 11 дър-

жави, седем от които – бивши съветски републики.

Радва представянето на българите. При жените имаме две трети места – на Любов Димитрова в кат. над 72 кг и на Любов Гълъбова в кат. 56 кг. При мъжете Цветко Цветков е трети в кат. 86 кг.

По време на турнира се е състояло съ-

вещание на ръководителите на националните федерации по джудо от балканските страни и е било взето решение за възстановяване на балканските първенства. Остава открит въпросът, дали те да са за мъже и жени или пък за състезатели до 21 години. (Спорт)

„Булстрад“ АД е новият

5月26日スポーツ紙に掲載

д-ли-
А с
в.
та в
Ни-
фон-
ион-
дели
е из-
коя-
е из-
пор-
пит
ини-
ства-
м за
а не
бой-

дурманска... в Община "Тур...

ДЖУДО

Три пъти трети край Босфора

ВЛАДИМИР СТОИЧКОВ

СОФИЯ. С три бронзови медала се завърнаха нашите джудисти от турнира за купата "Босфора", проведен в Истанбул. В него участваха общо 184 състезатели от 11 страни, като България беше представена от втория си състав. Бронзовите медали станаха притежание на Цв. Цветков (86 кг), Л. Димитрова (плюс 72 кг) и Л. Гълъбова (56 кг). Турнирът е етап от подготовката на националите ни за световното първенство в Торонто (1 - 4 октомври). За

мястото със самолета към Канада засега могат да бъдат сигурни единствено П. Ботев и Йв. Нелков, които според съобщения треньор Пламен Палазов са извържали най-важната квалификация, а именно европейското първенство в Атина. Останалите имена ще се уточнят след лагерите в Белмекен, Костендил и София и предстоещите международни турнири. В тренировъчния процес ще участва и японският специалист г-н Ямамото.

Вс
М
Вс
В сред
онна
ство
дия
мин.
Дн
Бире.

1. Иср
2. Да
3. Ем
4. С
5. Ли
6. Ла
7. Ал

ДЕЦАТА СПОРТУВАТ

Стадион "Металург" събра нечуввана досега публика

ПЕРНИК. Учениците от кварталните училища видяха какво ли не вчера на спортния празник по случай Деня на детето. Главни действащи лица бяха спортистите от клубовете на територията на квартал Изток.

Празникът започна с футбол; после дойде ред на демонстрациите по джудо и малките джудисти от клуб "Нилтон-МСВ" показаха сила и умение. На татамито стъпиха и "живи" янончи, инструктори по джудо и джудочу Тацумата Ямамото (IV дан) и Ка-



дзя Сато (III дан). Те са на разположение на нашата федерация, за да научат на нещо състезателите ни от полза е, а дойдох в Перник по покана на

местния джудо клуб "Нилтон-МСВ". Молячите от състава по хужествена гимнастика (треньор Руляна Костин) украсиха празника.



а се видях че и байбола ще има бъдеще в Перник - малките "мисци" от "Олимпик-25" са понуцили доста неща... Класа и общинарите посетиха празника.

На децата иля беше интересно, но не по-малко си изкараха и трила почитателски на фолклора, които с гайда, гъдулка, кивал и чашка в ръка си разподробяваха деня в аперитива до стадиона.

Ангел ПЕТРОВ





ОТ ИЗВОРА

ДЖУДОТО СРОДИ СТАРА ЗАГОРА С ЯПОНИЯ

Вчера клубът по джудо, джу-джудо и самбо „Берое“ посрещна гост от страната на изгряващото слънце. Казия Сато - джудист трети дан, е поредният специалист в Българската федерация по джудо, които чрез японското посолство у нас кон- тролна целесъобразно използване на японската помощ, възлизаща на 7,5 милиона долара. Той бе придружаван от ген. секретар на федерацията Асен Ко- руджиев и съюзния треньор Пламен Палазов. Г-н Сато бе любезен да даде ин- теракно специално за читателите на в. "7+7".



Г. С. (7+7)
發展をいひます
佐藤 一也

- Преди месец староза- горските джудисти полу-

чаен. Той е направен след задълбочени проучвания около състоянието на спор- та във вашия клуб - той трябва да е развил във всички възрасти, да са над 100 практикуващите, тре- нърите да са с ценз. Спон- сорният жест е своеобраз- но признание за качества- та на старозагорската шко- ла по джудо. Тя е предназ- начена само за държавни клубове, а контролът върху нейното използване се уп- ражнява от представители, определени от японското външно министерство.

седем години те се зани- мават с игри, в които има елементи на джудо. Знай- но е, че до дълбока ста- рост този спорт се уп- ражнява от японците. Работи се за здраве и жизненост, без да се форсира, което е много по-важно от медалите и титлите. За развитието му на българска почва бих отбелязал, че то е добро, като отчитам трудните финансови ре- алности в България се- га. Когато е силна ико- номиката, тогава ще има и силни турнири, както у нас. Там спонсорите влагат по 3 милиона до- лара за реклама, която се сменя периодично по време на състезанието.

мате нашата действител- ност?
- Да, за първи път съм тук и ще бъда до нача- лото на август. Харесват ми хората, които по тру- долюбие страшно много приличат на японците. Допада ми и вашата при- рода, видях пролетния цъфтеж на дърветата, който е като в моята ро- дина. Българите са сър- дечни и усмихнати хора, въпреки грижите. А Ста- ра Загора ме плени по- вече от Пловдив. С удо- волствие ще дойда пак.

Разговора води
Йорданка
ДЖОНДЖОРОВА
Г-н Сато пожела чрез автограф за нашите чита- тели по-добри времена за заралели и за спортния клуб по джудо „Берое“.

България и как възприе-

ДЖУДО



Посвещаване в тайните на джудото

"ХАДЖИМЕ!" ПО БЕРКОВСКИ

Непопулярен в Берковица, но достагътно респектиращ спорт, джудото привлече над 100 поклонници от различни възрасти. Обучението е напълно безплатно, води се в неделя, сряда и петък за деца, а за другите всеки ден от 17 ч. Джудо-клубът е официално регистриран и разчита много на нови попълнения. Започва се почти от нищото, липсват татами /специално покритие/ и кимона, но решенията идват мъгливоосно, като техниките в джудото. Двама известни специалисти в този спорт - Кадзия Саго - 3-

проведеното в края на май републиканско първенство в Пловдив, клубът спечели вице-шампионска титла за Мариета Георгиева и бронзов медал за Десислава Ваньова. Сигурно е, че ще има още много тигли, но вярваме, че ще се намерят и хора, които да помогнат. За да ги улесним - банковата сметка е 2221304770 - ОББ Берковица. Тази публикация е по желание на председателя на клуба г-н Лазаров. Изпълняваме го с удоволствие!

"БХ"



ГОСТИТЕ ОТ СТРАНАТА НА ИЗГРЯВАЩОТО СЛЪНЦЕ

Джудистите г-н Ямамото и г-н Сато се наляват джудото да намери своите корени и в Берковица. Началото е обнадеждаващо. Бъдещото ще покаже как този древен източен спорт ще се развива и в нашия град.

6月26日コム紙に掲載

ДЖУДО - МЕЖДУНАРОДЕН ТУРНИР „ДРУЖБА“

Злато, сребро и бронз

Доскоро познатите международни турнири „Дружба“ на бившите соцстрани ги приравнявахме с европейските първенства. Възстановеният турнир по джудо в Будапеща, който се състоя в края на миналата седмица, вече наистина е от европейски ранг, защото в него участваха и западни страни на Стария

континент. Стартираха 15 отбора, сред които три от бившия СССР. Много добре се представиха младите български надежди. При девойките Свилена Пенева (до 44 кг) и Мина Арменкова (плюс 66) станаха победителки, а Нели Маринова (до 40) е втора. При юношите, където конкуренцията бе изклю-

чително голяма, спечелихме две трети места: Петър Ардашев (70 кг) и Стефан Стефанов (78 кг). На крачка от златните медали бяха Георги Тонков (95 кг) и Йордан Гоцев (плюс 95), които останаха втори в категориите си. Безспорно това е един добър успех за българите.

ПЛАМЕН ПАЛАЗОВ

..... КРАТКИ | 10 000 м Сках (Мар) и Ондие-

6月30日スポーツ紙に掲載

第4章 付記

1 ブルガリア内のボランティア団体

(1) Peace Corps

2年前より活動を始めている。教育と中小企業援助の二つのプログラムのもと、6月まで45名が活動していた。2年契約なので9月より新しいメンバー30名（教師19技術者11）が活動する予定である。現在9週間の訓練中（文化・言語・技術）である。

この二つのプログラムは今のところ増える予定はないが、ポーランド・ハンガリー共二つ以上のプログラムのもとで活動しているので増える可能性はある。

教育分野においては、全員が英語教師で主に数学高校で活動している。（2名が英語高校、2名がヴェリコタルノヴォ大学で活動）授業では会話を担当している。配属先は全員がソフィア外で25都市に分かれている。（1993年6月までの配属先は資料添付）現在、契約を終えた1名はアメリカンカレッジへ就職する予定である。

住居提供は各配属先の学校が用意している。手当はブルガリア人教師の給与と同額である。

コーディネーターが各プログラム1名ずついる。が、さまざまな問題点は個々の問題として片付けているようだ。スタッフのみ毎週会議を行うがボランティア間の会議は特に設けていない。授業以外に、教材作成などのプロジェクトは組んでいない。

受入れ校に関しては、1年目は教育省を通じて派遣先を決定した（各学校からの要望に応じて）が、2年目からはPeace Corpsと各学校の校長との直接交渉によって派遣が継続か決まる。新規の要望に関しては、直接決めることもあるが教育省と調整して決める。活動している学校の見学を希望していたが、夏休みに入ってしまう、また、メンバー交代の時でもあり、実現できなかった。今後JOCVのメンバーが見学したい時はいつでもどうぞ、...ということなので是非見学をしたらいいと思う。Peace CorpsはJOCVにとって見習うこと、教えてもらうことが多いと思うし、同じ立場のものとして連絡を取り合い共によりよい活動ができれば、と思う。

副所長 Ms. Susanna Spauldingと面談

(2) オランダ

1991年よりボランティアを送っている。50歳以上の退職者対象で給与はブルガリア人平均収入より良い。住居はブルガリアが提供し航空券はオランダ政府が負担している。派遣期間は数週間～2か月である。政府の支援に対する年間予算は30000万ギルダー（1US\$=1.8ギルダー）。

内訳：1. 技術支援 5～6000万ギルダー。（コンピューター技術指導など）
2. 私営会社支援 1500万ギルダー。企業間の契約が基本で政府が支援。
3. 世界銀行支援 EBRD（欧州開発復興銀行）などの国際機関との協調支援。市場、経済への移行を支援する。

オランダのボランティア団体について

・SNV (organisatie voor ontwikkelingssamenwerkingen bewustwording)
一番大きい組織で政府が90%援助している。

個人組織のボランティアは宗教関係（カトリック・プロテスタント系）の団体を含め数多くある。

書記官 Mr. Carl Peersman と面談

(3) フランス

原則としてボランティアはいない。ただし、兵役（12か月）に変わるものとして16か月間ブルガリアで活動している人がいる。これは政府が雇っているかたちで、教師・コンピューターマネージャーに従事している。

・フランス語教育について

アリアセ・フランセより、現在6名が派遣されている。（高校2名、大学2名、仏語高校各1名ずつ・ヴァルナ、ヴェリコタルノヴォ、スタラザゴラ、ブラゴエフグラッド）外国語（英・仏・独）を選択している学生のうち39%が仏語を学習していることもあり、ブルガリア内の仏語のレベルは高い。フランス人教師は直接仏語を教えるのではなく、教師養成、コンサルタントとして教育要綱、カリキュラム作成についての助言などを行っている。

「フランス式の教育を持ち込むのではなく、ブルガリアのシステムにあわせて活動していきたい。原則はブルガリア側の自助努力を助け、パートナーとして足りないところを補いたい。」と、面談した参事官は強調していた。

(4) British Council

1991年にオフィスが開設された。GAP、VSO、EEPの団体にBritish Council から補助金が出ている。

現在、7名のボランティアが高校で英語を教え、1名が盲学校で活動している。任期は2年。GAP（6か月活動）より新しく2名が盲学校で活動する予定。各団体の資料及び現在の配属先については資料添付。

交通費はイギリス側が負担し医療費・ブルーパスポートに関してはブルガリア側が負担している。手当ては現地人給与並みで、住宅は配属先の学校が提供している。GAP以外の団体の条件は満たされている。GAPに関してはBritish Council が補助している。

東欧に行きたいという人を募集し、その後各国に振り分けている。事前語学訓練、任国事情の説明を行う。

問題点としては①EEPには現在コーディネーターも代表もいないので今後改善していきたい。

②十分な教材がない。

教育担当副所長 Mrs. Helen Dexter と面談

2 ブルガリア語

街中では英語がまず通じないので、ブルガリア語の習得は隊員にとって必修条件であり、十分な現地語訓練が必要である。

日本語教師の場合、クラス内でブルガリア語を使用する頻度は低いし、教育・科学省の人間と打合せをするにはある程度知識のある英語に磨きをかけた方が良いとも思われるが、一方では英語を解さない現場の人間も多いので、ブルガリア語習得は必要不可欠である。また、ブルガリア語の構造は日本語のそれと大変異なるので、ブルガリア語を理解しておくことは、ここで日本語を教えていく上で大きなプラスになるだろう。

隊員が現地語訓練を行える場所として以下の学校がある。

・ INSTITUTE FOR FOREIGNER STUDENTS

語学学校は沢山できているが、ソフィア市内ではここが最も信頼出来るとのこと。留学生はここでブルガリア語を習得してから大学へ進むものが多い。

1時間 = US \$ 4

1週間 20時間 100時間以上

・ ヴェリコ・タルノヴォ大学

8月1日より夏期講座がある。

US \$ 500 - 4週間

・ ソフィア大学

BULGARIAN LANGUAGE AND CULTURE SUMMER SCHOOL FOR FOREIGN BULGARIAN AND SLAVONIC PHILOLOGIST

8月1日～8月23日

US \$ 500

講座の行われる場所はその年によって異なり、今年はバンキア（ソフィアから車で約25分）。受講生は約50人。

3 要請のあがりそうな職種

- ・ 日本語教師
- ・ 数学教師
- ・ 剣道
- ・ 合気道
- ・ 空手
- ・ 柔道
- ・ 野球
- ・ 華道
- ・ 茶道

日本の文化に対する関心は深く、裏千家のモスクワ講師による茶道教室は大変好評であった。また実際ブルガリア人による華道教室も行われており、幅広い層に受け入れられると考えられるが受入先が難しい。空手と合気道も活動が盛んで、街でポスター類をよく見かけるのではあるが、流派による問題もあるので隊員の派遣は慎重を要する。

4 事務局への要望

(短期緊急派遣隊員として活動して困った点)

1. 短期緊急派遣として活動する際の簡単なマニュアルを準備して欲しい。
 - ・出発前の慌ただしい説明であったので、任地についてから活動内容について疑問点が色々生じた。
2. 隊員との連絡をもっと密にして欲しい。
 - ・例えば要請がどのくらい出ているのか、合格者がどのくらい出ているのか等、分かった時点ですぐに連絡をして欲しい（配属先や人数等、任地側へ一応の確認をして欲しい）。
 - ・今回の6ヵ月派遣のようにやや長めの派遣の場合はJOCVニュースやクロスロードを送って欲しい。これは隊員のためだけでなく、協力隊が初めて入る国の大使館、現地邦人及び現地の人々に宣伝効果があり、協力隊理解につながる。
3. 医薬品をもう少し持たせて欲しい。
 - ・医療事情は国によって異なり、日本のように簡単に手に入るとは限らないので、短期とはいえ、もう少し持たせて欲しい。今回特に困ったのはスポーツ隊員のシップ薬とテーピングで、会議の為ハンガリーに行った際にハンガリー事務所に分けて貰ったり、個人的に日本から送って貰ったりした。
4. 仕事内容、現地の情報については正確な情報が欲しい。
 - ・未知の国へ行くのであるから情報量が少ないのは承知しているので、未確認のことはそのままその旨を伝えて欲しい。
5. 短期緊急派遣の場合、誓約書が無いのを疑問に感じた。

5 参考書

書名	著者	出版社
ブルガリア	今岡十一郎	新紀元社
ブルガリア歴史の旅	香山陽坪	新潮社
ブルガリアの民話	真木二三子訳編	恒文社
鞭(くびき)の下で		恒文社
ブルガリア語常用6000語	松永緑彌	大学書林
ブルガリア語1500語	松永緑彌	大学書林
ブルガリア文法	松永緑彌	大学書林
現代ブルガリア語入門		泰流社
エクスプレス ブルガリア語	寺島憲治	白水社
ブルガリア語会話練習長	土岐啓子	大学書林
東欧革命と民衆		朝日選書
シリーズ東欧革命 ②		緑風出版
劇画 東欧の反乱		読売新聞社
ブルガリアI・II		ほるぷ出版
地球の歩き方 ブルガリア		ダイヤモンド社

・CD ブルガリアンポリフォニー (JVC ワールドサウンズ)

6 各隊員の感想

6ヵ月ブルガリアに住んで強く感じたことは、人々のやさしさと社会主義政策の良い遺産—市内交通のバスなどが早朝から深夜まで運行していたり、階段には必ずといっていいほど乳母車用のレールがあったりすること—そして教育水準の高さでした。この国の10年後20年後が楽しみです。以上。

榎本安吾 日本語教師—ヴェリコ・タルノヴォ大学

日本からこんなに遠く離れたところで日本語を勉強したいという、それも大変若い生徒たちがいるのは驚きでした。

多くのブルガリア人は人種に対する偏見を少なからず持っているようで、アジアから来たすべての人を歓迎しているわけではありません。しかし、その中で頭一つ飛び出している日本を全く別の目で見えており、「日本人」というだけですっかり好意的になってしまう彼らの態度に、嬉しいと言うよりも正直言って戸惑いを覚えるのです。多くの日本人にとってブルガリアは、どこにあるのかも即答出来ないほどまだまだ関心の薄い国です。ブルガリア人は日本にどんな理想を抱いているのでしょうか。

ブルガリアの社会はゆっくりと、しかし確実に今までとは違った方向に進んでいるようです。多くの人がその流れにのったり抵抗したりしているところですが、同じようにバタバタと慌てている人達が日本語教育者の中にもいます。アルバイトのために授業を平気ですっばかし、小銭をかき集めるのに忙しくしている人がいます。日本語教育で今一番改善しなければならないのは教師達の仕事に対する姿勢ではないかと思うのですが、だからと言って外部の人間が、一方的に彼らを責められない事情がここにはあります。

ブルガリアの教師は薄給で働いています。特に初等教育・中等教育の教師達は雀の涙のような時間給で質より量、内容より何時間授業を受け持つかに関心が向いてしまいます。もし通訳の仕事などでその何倍もの金を得られるのなら、授業をすっばかしても当然そちらに行ってしまうでしょう。そういう教師をかばう気持ちはサラサラありませんが、社会が大きく変わり「働かざる者食うべからず」の時代になってしまった現在の彼らの焦り、それでも以前の生活は崩せないというプライドを厭でも感じてしまうので、頭から非難することが出来ないのです。

私が勤務していた高校で出張授業をしていたソフィア大学の講師はアルバイトに忙しく、他の教師が迷惑を被ることがよくありました。しかし、彼女が教えたところはきちんと生徒の頭に定着していて、日本語を教えるという点についてはそれほどいい加減ではないようです。それに何よりも彼女の風貌、年齢が13~15歳という生徒をしつけるのに適した「お母さん」のそれと同じであり、生徒をきちんと叱れるという強みがあります。日本語教師として悪戯に経験年数だけあり、言葉を教える以外に躰という新しい要素が加わると、途端に戸惑ってしまう自分の未熟さを痛感させられました。最も周囲に非難されている教師に、自分の教師としての欠点を思い知らされるというのは皮肉なことですが、これも事実です。

新しい社会を造るために、自由で新しい教育が求められています。教材や教え方には貪欲で、新しい教育を何でも取り入れてみようという意気込みがあります。しかし一方では、教育者が教育にだけ専念できない事情もあります。教師の仕事のやり方を簡単に非難できるほど豊かな国から来た新隊員にとって、腹の立つことは何度もあるでしょうが、ブルガリアの内側から物事を見ることも時には必要です。この半年の間、私自身つくづくそれを感じました。

戸島 真由美 日本語教師—ソフィア第18高等学校